
静かの海

くろやまねこぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かの海

【Zコード】

Z9963W

【作者名】

くわやまねじだつ

【あらすじ】

内定を取り消され、やさぐれる大学生・矢野行成は、近所に住む小学生・マサキとふとしたことがきっかけで知り合う。転入したてで周りに馴染めないマサキは、親切な行成に懐き、行成もまたそんなマサキを可愛がる。二人は徐々に親交を深めていくが、マサキには行成にどうしても言えない秘密があり……。青春の入り口と出口で出会った二人の、成長と小さな恋の物語。

プロローグ

その人を初めて見たとき
泣いているように見えたんだ

＊＊＊

「マサキ、もうやめなさいが迎えにくるから、家の外で待つてなさい」

そう急かされ、顔を上げて母親の方を振り向いた。
父親が愛し、自分が生まれ育ったこの家。だけれども、家主を失つたことで、自分たち家族はここを離れ出て行くことになった。
寂しさとも悔しさともつかない気持ちを抱えながら、ぎゅっと手中にある多孔質の白い石を握りしめる。

家の前でボーッと佇んでいると、ブレーキの音と共に海外製の緑のワゴン車が滑り込んできた。

重いドアを開いて後部座席に乗り込むと、キヤンキヤンと吠える犬が膝に絡みついてくる。なんとかあやしつけていると、少し送れて母親も助手席に座った。

車がゆっくりと加速していく。行き先は、都心に近い住宅街だ。
母親の実家にほど近い場所であり、ここよりもずっと人が多くてにぎやかだと聞いている。

母親は住み慣れた街に戻ることを喜んでいたようだが、自分にとつてはまず馴染みがない。

「高速、混んでるかしら」

「五・十日だからちょっと渋滞してたよ。でも、まだ早いからそんなでもないんじゃない」

大人一人の会話を聞き流しながら、遠く晴れた空に漠然とした不安を感じていた。

小学生（1）

『誠に勝手ですが、事情』理解の上お聞き入れ下さりますよつ何卒
よろしくお願ひいたします。

まずはお詫びをお願い申し上げます。

敬具

そう締めくくられた白い紙をぐしゃりと握りつぶすと、公園のベンチに腰掛けた彼は唇を噛んで俯いた。

吹く風が生ぬるい。本格的に梅雨のシーズンを迎えるまであと少しだろうか。そんなまとわりつくような周りの空気も、彼の気分を一層苛立させていく。

（何が『敬具』だ、ちくしょう）

一体自分が何をしたというのだ。脚を棒にして何十社と周り、週末という週末をほぼ会社説明会に宛て、いろんなものを犠牲にして勝ち取ったはずの内定だった。

採用通知が来た日は嬉しくて、何ヶ月も連絡をしていなかつた実家にまで電話をかけてしまった。

『アンタ、入ったからにはちゃんと勤めなさい』

母は喜びながらそう口にした。まだ入社したわけではないが、内定を貰えればこちらが蹴らない限り入ったも同然だ。もちろん、母親に言われなくとも、この不景気の中せつかく探つてもうつた会社だ。ちょっとやそっとのことで辞めるつもりはない。

それなのに、何で

こんな紙切れ一枚で、その覚悟もすべて霧散してしまった。ここ数ヶ月の努力だけではなく、今までの人生全てが否定された気分になる。

悔しい　けれど、涙の一つも出でこない。

同じような思いをしている学生など「まん」という。そういうふた者達と傷をなめ合うことができたら、この気持ちも少しは楽になつただろう。だけれど、四年進級時にうつかり留年をしてしまい、友達のほとんどが既に卒業していった彼にはその痛みを分け合つ仲間すらおらず、ただやりきれない想いで砂利を蹴るしかなかつた。

ザツと革靴の底が嫌な音を立てた瞬間、下を向いていた視界がふと暗くなつた。

「ねえ」

近くで高い声がした。このまま無視しようとしたが、その声の主はもう一度「ねえ」と言つた。

しぶしぶと顔を上げる。逆光で最初はよく見えなかつたが、シルエットから判断して、どうやら話しかけてきたのは男の子のようだ。目がだんだん馴れてくる。男の子は見た感じ小学校高学年か。さらさらの髪の毛に中性的な顔立ちが特徴的で、これであと一年もしたらアイドル系だと女の子にキヤー キヤー 言われそうなタイプだ。それが、迷彩柄のTシャツに半ズボン、黒の運動靴という幼さのまだたつぷり残つた格好をしており、半ズボンから伸びる足は程よく日焼けしていた。

「なんだよ」

胡乱な彼の反応に男の子は少し怯んだような表情を見せたが、すぐに真つ直ぐな視線で彼の目を見て言った。

「お兄さん。うちの犬みなかつた？」

「犬？ どんなの？」

「耳が でさきっぽが折れ曲がってて、茶色と黒の間みたいな色しててこれくらいの……」

男の子が手振りつきで一生懸命説明する。が、生憎そのような犬はここに来る前も途中も見かけたことはなかった。

「いや、見てないけど。逃げたの？」

「うん。さっきまで一緒に散歩してたんだけど、信号待ちしてる間にいなくなっちゃって。あいつすげい足早いから……」

そう言つて睫毛を伏せた。可哀想だと思つたが自分にはどうすることもできない。一緒に探してやるほど自分もお人好しではない。

「悪いけど他あたつて」と言おうとしたとき、男の子の肩越しに砂場を横切る茶色い影が見えた。

「あ、あれじゃね？」

男の子が振り向く。「あつ！」と声を上げると同時に、見つかることに気づいた犬がやおら走るスピードを上げた。

犬は男の子の言つとおり、とても逃げ足が速い。男の子が追いかけるが、子供の脚ではとても追いつきそうにない。

一生懸命走る男の子の姿を見て、俄にくすぶつていたプライドに火がついた。

「元野球部なめんなよー。」

彼は急に立ち上がりつてそう宣言すると、犬の方に向かって駆けだ

した。スースの下に革靴なので多少動きづらいや、それでも持てる限りの力を出す。

犬が池の前で急に進路を変える。それを見越して彼はショートカットして犬に飛びつく。リードが手に触れる。あともう少し。

「よつしゃー！」

ズギーっと地面に転がりながら、間一髪のところドリードを捕まえた。首輪を引っ張られた犬が情けない鳴き声を出して立ち止まった。

犬がワンワンと吠えながら今度は彼にじやれついてきた。まったく、変わり身の早い犬だ。

「すみません、大丈夫ですか！？」

パタパタと追いついてきた男の子が青い顔をして彼に尋ねた。服は汚れてしまつたが払えば何ともないし、こんな子供に心配してもらうのも決まりが悪い。

「いや、大丈夫大丈夫」

そう言つてリードを男の子に渡した。久々の全力疾走は、疲れたがなんとも気持ちよかつた。少し、気分も軽くなつた気がする。

「今度は、離さないようにしなきゃダメだぞ」

立ち上がりつて男の子の頭をぽんぽんと撫でた。夕方6時のチャイムが遠くに聞こえる。

さて、自分もそろそろ帰るか、と伸びをしたとき、男の子が不安げに口を開いた。

「お兄さん、大井戸町つじどうちゅう？」

「大井戸？　ここから結構あるぞ」

聞いてぎょっとした。今いる公園からだと、大人の自分でも歩いてたつぱり30分近くはかかるだろう。男の子はバツが悪そうに呟いた。

「散歩をせんたら、迷っちゃって」

……土地勘のない子なのだろうか。

言葉で説明しても伝わりにくいだろうし、ちょうど自分の家も同じ方面だ。それに、日も暮れかかっているのに小さな子をひとりで歩かせるのは危険かもしれない。

「しょうがねーなー。……近くまで、送つてやるよ」

2・3回首を回してからそつ言つと、男の子の肩を押して歩き始めた。

地面には小さな影と大きな影、それに挟まれた犬の影が長く伸びていた。

小学生（2）

大井戸町まで帰る途中で、犬が道にしゃがんだまま急に一步も動かなくなってしまった。

口笛を吹いても置いてけぼりにするそぶりを見せても一向に動かない。男の子は「またか」とため息をついた。

「どうしたんだ？」

「こいつ、いつもこうなんだ」

そう言つて男の子は細い腕で犬を持ち上げた。少し大きな小型犬ぐらいのサイズだったが、子供の体力では抱えたまま歩き続けるのはいかにも大変そうだ。しかも、まだ道のりは半分ぐらいまでしか来ていない。

「貸して」と言つて犬を男の子から奪つた。柴とビーグルの雑種だというそれは、近くで見ると愛嬌の良さと凜々しさが絶妙なバランスだつた。

犬を抱っこしながらニヤニヤとしていると、男の子が不思議そうに聞いてきた。

「お兄さん、犬好きなの？」

「ああ。実家にはもうじじいの犬が二匹いてさ、どちらも雑種でブサイクなんだけどそれがもうすげー可愛いのよ。そんで、小さい頃は獣医になりたかったな」

実家の犬が吐血して倒れたとき、あまりにも心配で「大きくなったら絶対に自分が治す」と心に誓つた。そしてしばらくは本気でそつちのほうに進路を決めようとしていたのだが。

男の子が当然の「ごとく疑問をぶつけてきた。

「なんでなんなかつたの？」

「俺、猫アレルギーなんだ」

近所の猫が家に入ってきたとき、田は涙で一杯になるわ、体中は痒くなるわで大変な思いをした。それ以来、猫は自分にとって天敵である。

「そつか。獣医さんとこには猫もこっぽくくるもんね」「だら。だから俺は諦めた」

そうでなくとも獣医になるのは非常に狭き門をくぐらなくてはならないと後々知るのだが……。その辺は小さい子に説明しても解らないだろ?と思いつつ省略した。

今度はこちから男の子に質問する。

「名前なんていうんだ?」「名前? ガリレオだよ」「犬じやなくて、お前だよ」「あー……、え、と」

男の子は一瞬口ごもつてから、小さな声で呟いた。

「まさか」

言ひのをためらつたからどんな変な名前なのかと思ひきや、案外普通で拍子抜けした。

「マサキか。なかなか渋くていい名前だな」

最近は奇抜な名前を付ける親も多いと聞くが、それなりにきちんとした家の子なんだろう。そういうえば、自分に敬語は使わないもの、しゃべり方も「これぐらいの歳の子にしては落ち着いている。

「お兄さんは？」

「俺？　俺はユキナリ。行くに成るつて書いて行成」

「何やつてる人？」

「大学生だよ」

彼の言葉に、マサキはびっくりしたように顔を見開いて、そのあとくすぐすと笑いながら言つた。

「へー、そなんだ。ネクタイしめてるから働いてる人かと思つてた」

そう言われ、自分がスーツを着ている理由を不意に思い出した。今日は以前お世話になつた講師の学会発表があつたのだ。出掛けにポストを覗いたら内定先からの手紙が入つていたので鞄に放り込み、帰りに内容を読んでみたらあのザマだ。

就職が決まつたことを恩師に伝えると、それはもう喜んでくれた。あの笑顔も自分は裏切ることになつてしまつた。しかも、学会では昔付き合つていた女が他の男と仲良くなつていてる様まで見てしまつた。

今日は人生最悪の日だ　、　そう思つていた。

けれど今は、何故か心がそんなに重くない。

(やつぱ子供と動物の癒しパワーワーク すげえな。)

あぢけのないマサキの横顔を伺いながら、彼はそうしみじみと感

じ入った。

* * *

早々にシャッターを下ろしてしまった簡易郵便局の前で、マサキは立ち止まつた。

「もうすぐそこだから、ココまででいいよ

ふと見ると、電信柱の住所表示にも「大井戸町」と書いてある。やっと近くまで来たようだ。

「そつか。今日は大変だったな」

犬をマサキに受け渡す。「おつと」と言いながら抱え直すと、マサキは勢いよくこちらに向かつて頭を下げた。

「あ、あの、ありがとうございました」

急に礼儀正しくなる。そんなマサキがおかしくてちょっと笑つてしまつた。

「じゃ、またいつかどつかで会おうな」「うん、またね。本当にありがとうございました。」

そう手を振りながら、一人は別の道を歩き出した。

小学生（3）

一つめの角を曲がると、見慣れた自宅の外灯が目に入った。

犬のリードを玄関の支柱に繋ぎ、特にチャイムを押すこともなくドアを開ける。

「ただいま」と呼びかけると、台所から母親が顔だけ出して言った。

「遅かつたじゃない。おじさんもう来てるわよ」

それは玄関に男物の靴があるから知っている。リビングへ向かうと、叔父がソファにもたれかかりながら、ワイシャツを着たままビールを飲んでいた。

「おじさん、ガリレオ散歩させてきたよ
「おー、すまんな。ありがと」

ガリレオはもともと叔父の犬である。ここ一週間出張で家を空けることと、叔父の姉である母親が預かっていた。

「ほら、お礼だ」と言って出張先の名産であるカスタードまんじゅうを受け取った。椅子に座つてもぐもぐと食べていると、母親が追加のビールをもう一本持ってきた。

叔父はビールの栓を抜きながら言った。

「どうだ、マー坊、友達100人ぐらいできたか？ 好きな子のひとりやふたりいるんだろう？」

唐突な質問に心臓が跳ねる。顔が赤くなつてくる。そんな様子を、

叔父はにたにたとしながら見ていた。

まんじゅうを気管にまらせそつこなりながら飲み込むと、じぶるもじりの体で言った。

「あ……、そうだ、宿題やんなきやー。」

椅子から飛び降りて、急いで階段を駆け上る。バタンーとドアが閉まる音が聞こえると、リビングにいた母親は大きくため息をついた。

「忠晴、あの子に変なこと言わないでよ。なかなか友達できなくてへこんでるみたいなんだから」

4月に転入ってきて2ヶ月経つところ、一向に学校での様子や友達の話をしない。そんな自分の子供に、彼女は日々心を痛めていた。

「おお、すまんすまん」

「それじゃ、マー坊つて止めてって言つてるでしょう」

「でも、浮びやすくて」と受け流さうとする弟に、彼女は「本当に勘弁してよ……」と涙ながらに言った。

「あの子……、真咲はちやんとした女の子なんだから。あの子もアントも、どうかしてるわ……」

* * *

真咲は自分の部屋に戻ると、窓を開けて空を見上げた。

紫がかつた西の方の空に、葉っぱのように細い月が引っかかっている。

ベッドサイドに置いた石を手のひらで包むと、心の中で月に向かつて呼びかけた。

(お父さん、今日は聞こえる?・)

去年、病氣でその短い命に幕を下ろした父親。父は息を引き取る直前に、死期が近いのを勘づいていたのか、末の娘である真咲に向かつてこんな事を言った。

『真咲、もしお父さんがいなくなつても、お父さんはずっと真咲のことを遠くから見てるからね』

遠くつてびーっ。と尋ねると、『そつだね、お月様ぐらこかな』とはにかんで笑った。

『月に行つたらもう会えなこよ

そうぐずる真咲に、父はこの口を手渡したのだ。

『なにこれ?・』

『月の石だよ。お父さんはそれを取つたりやんと帰つてきた

しかもそれを持つてると月にいる人と会話ができるんだよ、と。嘘みたいな話だ、と思つた。それから幾ばくもしなこうちに、父

親は本当に天へと旅立つてしまつた。

母親を心配させたくないくて、皆の前で涙を見せることはなかつた。

けれど、一人になるとあの優しい笑顔を見られないことが淋しくて、目が解けるほど泣いた。

そんな中、父からもった月の石のことを思い出した。魔法や奇跡を信じる歳でも無くなっていたが、万が一にも本当に父と会話ができるのならば、試す価値はある気がした。

(お父さん)

呼びかけると、『なに?』という穏やかな声が耳を掠めた。微かだが、確かに聞こえた。

月にいる父親も、こちらで生きていたこと同じよつたらしいのか、話しかけても答えが返つてこない日もあった。だけど、こちらに引っ越してからはだいたい毎日現れている。

いつしか真咲にとって、毎晩月に祈ることは口課となっていた。

(お父さん、今日、変な人に会ったよ)

今日はあまり用事がないのか、『へえ、どんな人?』とすぐに返事がきた。

(男の人のくせに色が白くて、目がへ音記号によじにしたみたいな形で、口が猫みたいに真ん中がとがつて……)

『ふんふん、そうなんだ』

(でもそのくせ猫がダメなんだって。それで、最初、ベンチに座つて下向いてるから、大人なのに泣いてるのかと思った)

『で、どうしたの?』

(気になつて話しかけたら、ちょっと怒つてゐみたいなしゃべり方
だつたからびっくりした。……けど、すごい親切だつたよ)

『そうか。いい人だつたんだね』

思い出すだけで心がむずむずする。ガリレオをダイビングキャッチしたところも、「しょーがねーなあ」と言いつつ肩に触れた手が優しかつたことも、犬を抱っこしながら幸せそうに笑つていたことも……。大人の人があんなにくくるくる表情を変えるのなんて、今まで全然知らなかつたから、馴れないことに心臓はぱくぱくいっぽなしだつたんだ。

またどこかで、と別れ際に言つた。あの時彼はどういうつもりで言つたのかわからぬけれど、少なくとも自分は本心から言つていた。

(もう一回念えたらいいな)

そう願つた真咲に、心の中の父は『それはお父さんに言われても分からぬよ』と穏やかに笑つた。

藍色（1）

きつかけは、父方の祖父母がくれたランドセルのようだと思つ。それまで真咲は、大人しくて目立たない普通の子供だった。年の離れた兄姉は物心も十分ついたころにできた小さな妹に対して感心が薄く、母親は手のかからない子なのを幸いに、真咲が就学する前から仕事に復帰していた。

「真咲、おじいちゃんおばあちゃんからプレゼントだよ」

小学校に上がる直前、彼女は自分宛に届いた包みをあけてびっくりした。そこには、青色とも黒ともつかない不思議な色合いのランドセルが入っていたからだ。

「きれいな色だね」

「ホントだ。お父さんも大好きな色だ」

父親はそう言って「これは藍色って言つんだよ」と真咲に教えた。あいいろ、あいいろ……。耳慣れない響きだったが口に出すと心地よく、また難しい言葉を知ったことで少しだけ大人になつた気がした。

今になつて思うと、祖父母があのよくな色を選んでしまつたのは、真咲の性別を一つ下の従兄弟と間違えていたのかもしない。母親は「女の子なのにこんな色を使うのなんて可哀想」と送り返そうとしたが、父は本人が気に入つているのだから、とそれに反対した。

結局真咲の「どうしてもこれがいい」という駄々により、母親が折れた形になり、入学式には喜び勇んでそのランドセルを背負い校門をぐぐつた。

幸い、入学した小学校には保育園からの見知つた顔も多く、また

そこそこ田舎でおおらかな土地柄だったため、真咲のことをランドセルの色でいじめるような者は一人もいなかった。むしろ、「珍しいね」と言われてすこし得意になつたりもした。

それから真咲は髪を切った。小学校に入り行動範囲が拡がると、もともと女の子同士がするようなお人形遊びが得意ではなく、野山をかけずり回る方が性に合つていてことに気づいたからだ。洗うのも乾かすのも、短い髪は楽である。そして着る服も、より動きやすいもの、汚れが目立たないものを多く選ぶようになつていた。

そんな真咲の変化に母親はあまりいい顔をしなかつたが、真咲は別に悪さをするでもなく肝心の勉学には眞面目で、近所の子を持つ親から「優秀でうらやましい」と褒められる。自身も忙しくて構つてやれないことが多い手前、娘に強いことを言える立場になかつたのだろう。

『気が付くと真咲の外見は、同年代の男の子のそれとほとんど変わらなくなつっていた。

そんな様に、ちょっと風変わりながらものんびり育つていた真咲だが、ある時期を境に生活は一変する。

有能な外科医だった父親の死。もともと都會育ちのお嬢さん気質だった母親は、田舎の暮らしにどうしても馴染めず、真咲をつれて実家へ帰ると言い出したのだ。

上の一人の子供は進学や就職すでに家を出ている。それに、亡き夫にして土地の人間というわけではなく、たまたま待遇の良い病院があつたためそこに赴任してきたに過ぎない。

真咲が小学校の六年にあがるのを機に、母娘は街を離れた。

「せめてあと1年、みんなと一緒に卒業したい」 真咲の願い
は聞き入られなかつた。

真咲が新しく入ったのは、都内でも比較的裕福な家庭の集まる地域の公立小学校だった。周辺の学校に比べ荒れている者は少なかつたが、その分どこか余所者を寄せ付けないプライドのようなものを感じた。

真咲は地方からやつて来たにもかかわらず、素朴な雰囲気がなく、どちらかといふと醒めていて勉強もできる。それに加え服装はまるで男子のようで女子とはつるむ気配がない。

クラスのリーダー格の女子に「生意氣」「変人」と目を付けられるのも時間の問題だった。

他の児童達にもそういう空気は瞬時に伝染する。担任の教師に「真咲ちゃんのことよろしく頼んだよ」と言われた学級委員の子とその友達のみ、教室移動や給食の際などに真咲に話しかけていたが、リーダー格の女子の顔を伺っているのか、明らかに腫れ物を触るような扱いでしかなかつた。

* * *

「真咲ちゃん、あたし、これからバトン部の練習だから」

帰りの会が終わると、学級委員の子が「だから、「ごめんね」と首を傾げながら言った。だけでもうそんなの言われなくとも分かつて。彼女はいつも部活や塾があつて、一緒に帰つたことなどこれまで一度もない。もしかしたら断る為の嘘なのかもしれないが、そんなの確かめたつて何にもならない。

(まあ、仕方ないんだけどね……)

藍色のラングセルを背負うと、昇降口で運動靴に履き替え、鈍色の空を見上げてため息をついた。今さら服装の趣味を変えることもできず、愛想良く振る舞えない自分が悪いのだから。それに中学は母親の期待する私立の学校に進学する予定だ。泣いても笑つてもあと数ヶ月。そう思えば我慢できる。

だけど、きやあきやあと楽しそうにじやれ合いながら下校する児童の群れを見ていると、なんとなくやりきれなくなつてくる。自分だって地元にいればあの中に入られたはずなのに。

(みんな、どうしてるかな……)

懐かしい友達の面々を思い出しけたところで、鼻先にポツン、と冷たいものを感じた。

(雨だ)

そう思つたが早いが、雨足は急激に強さを増してきた。やばい、と傘を持つていらない真咲は、近くの屋根付きのバス停へと逃げ込んだ。

薄いプラスチックの屋根をドタドタと激しい雨が打ち付ける。「そういえばお母さんが朝傘持つてけつて言つてたな」と思い出すがもう遅い。どうすることもできないまま、真咲はバス停に佇んだ。雨はいつ止むとも知れない。遠くの空を睨むが雲の切れ目はまったく見えない。途方に暮れていると、田の前に一台のバスがゆっくりと滑り込んできた。

ぎゅうぎゅう詰めの車内から、一人、二人と乗客が降りてくる。客はバスに乗ろうとしない真咲のことをすれ違い様に奇異な目で見ていったが、すぐに傘を開くと興味が失せたように歩き出した。バスは乗る人もいないのになかなか発車しない。どうしたんだろう、と見てみると最後一人の客がやつとはき出された。その客は長

い手足をよりめかせて地面に降り立つと、バス停にいた真咲の顔を見て「あつー」と言つた。

「お前、この前の……」

彼の方は名前が出てこないようだが、真咲はよく覚えている。

(ユキナリ、だ)

だけれども、驚きすぎた真咲には声を出すことができなかつた。

藍色（2）

郵便局の前で別れてから、一緒に歩いた時のこと何度も何度も繰り返し思い出してきた。その度に、「もう一度会えたらしいな」とほんやり願っていた。

だけど、名字も連絡先も分からない。「近くに住んでいる大学生」なら「まん」といるだろ？隣に住んでいる人の顔すら知らないこともあるこの時代だ。再び出会いとなど奇跡に等しい、そう思つていたが……。

（どうしよう、本当にまた会えた）

今日の行成はネクタイを締めていないせいか、以前会った時よりもずっと若く見えた。もともと童顔っぽい造りもあり、顔だけ見れば高校生と言つても通用しそうだ。

自分の顔を見上げたまま固まつてしまつた真咲に、行成は首を傾げながら尋ねた。

「お前、こんなとこどうしたの？」

真咲はかきつゝ喉から、声を絞り出して答えた。

「あ、あの、急に雨ふってきたから、雨宿り」

「ああ。傘がないのね」

真咲の両手は空いていて、シャツは端々が濡れて変色している。そんな姿を見て、行成は納得したよつて頷いた。

「俺んちすぐそこだから、傘もつ一本持つてくるよ。貸してやつから

後ろの方を指さした行成に、真咲はぶんぶんと首を振った。

「でも、今日カギも忘れちゃって家に入れないんだ」

先ほどポケットの中に手を突っ込んだら、いつも持っているはずのカギが見あたらなかつた。晴れていれば庭にある脚立でも使って開いてる一階の窓からでも侵入するところだが、この雨ではそもそもかないだろ？

「家族は？」

「いない。みんな出掛けたる」

母親は6時過ぎにならなければ帰つて来ないし、本宅の祖父母も今日は町内会の旅行で出掛けてしまつてゐる。どのみち、雨が止むまで待つしかないのだ。

すると行成は、「ふーん」とあまりヒゲの生えてない顎を撫でながら言つた。

「そんじゃ、わ。ちよつとお前づり来る？」

「えつ」と真咲は目を丸くする。

思つてもいゝない申し出に頭が混乱し始める。よく知らない人に着いていってはいけないと言われているが、どこをどうとつてもこの人が悪人だとは思えない。だけど、一応自分は女子だしもし万が一下心があつたとしたら……などと考えがぐるぐる回る。

どう答えていいかわからずしどりもどりになつていて、行成は「へつ」と少し情けなさそうに笑つた。

「バイトでやつてるテストの採点なんだけど、結構量あるから手伝つてほしいんだわ。もちろん、なんかお礼はするからね」

そう頼まれて心がぐらりと動いた。この前助けてもらつた借りがある手前、断ることはできない気がした。

……ところは建前で、本当はこのお兄さんがどんな生活をしているのか、非常に興味があつたからだ。

真咲が「うん」と頷くと、行成は「おう、じゃすぐとつてくれるな」と言って傘を開いてバス停を出た。
雨はまだ、止みそうにない。

藍色（3）

行成はものの5分ぐらいでバス停へと戻ってきた。本当にこの近くに住んでいいようだ。

ビニール傘を手渡され、水たまりを踏まないよう気をつけながら歩く。途中、同じ学校の誰かに見られやしないかとびくびくしたが、そんなことを思っている間にアパートへとすぐ着いてしまった。表札に右下がりの可愛い字で「矢野」と書いてある。彼のフルネームは「矢野行成」だと知った。

「汚いけど、ま、上がつてよ」

行成について玄関で靴を脱ぐ。

外観は古びていてお世辞にもあまり立派とは言えなかつたが、その分部屋の中は案外広々としていた。台所も一〇コンロがちゃんと設置してあり、深い流しきれいに磨かれていた。飲み干したビールの缶がゴミ袋いっぱいに詰まっているのが、「らしい」といえばらしい。

台所とガラスの引き戸で区切られた部屋の中は、たくさんの本や服などで散らかつてはいたが、不潔な印象はなかつた。だけれども畳に敷きっぱなしになつてている布団と、その上に脱ぎ散らかしたTシャツとぐしゃぐしゃに丸められた肌掛けが放置されているのが目に入ったとき、何故だか見てはいけないものを見た気がしてドキッとした。

「これで体を拭け」とタオルを差し出されたので、ありがたく使わせてもらひ。紺色の無地のタオルは、柔軟剤の強い花の香りがした。

部屋の真ん中に置かれたテーブルの前に正座すると、向かい側に

座った行成が、裏地がオレンジ色の黒いてかでかした生地の鞄の中から紙の束を取り出し、それをドサッとテーブルの上に置いた。

その一枚目を真咲に向かつて差し出すと、濃いピンク色の水性ペンで右端を指し示しながら言つた。

「(+)の欄の点数、全部足して上に書いて」

真咲が任されたのは、大問ごとに出された点数の、最終的な合計を出すことだつたようだ。これは間違えられないぞ、と妙に気合いが入る。

電卓をつかうかどうか聞かれたので、「いい」と首を振る。一桁同士の足し算ぐらいなら暗算でもできるし、その方が早い。

雨音が響く中、黙々と作業を進める。途中で行成がやつている正誤判定に追いついてしまったので、小問の合計も真咲がやることになった。

「終わつたよ」と声を掛けると、点数を表に書き込んでいた行成が顔を上げてこちらを見た。

「おお、サンキュー。助かつたよ」

屈託のない少年のような笑顔。見ていると言ひよりもなく落ち着かなくなつてくる。

行成は「……いしょ」と言つて立ち上ると、首をぐりぐりと動かしながら尋ねてきた。

「あのわあ、ホットケーキ好き?」

うん、と頷く。たいていの甘いものは好きだが、ホットケーキは格別だ。……と言つたが、世の中にホットケーキを嫌いな人なんてい

るんだろうか、と真咲は思つ。

すると行成は流しの下の扉を開けて、大型のボウルとかき混ぜ器、それと冷蔵庫から牛乳と卵、粉などを取り出した。

「俺、これだけは作るの上手いんだ。実物見てビビんなよ」

そう豪語すると材料を次々に量つては混ぜていく。真咲は横でその様子をボーッとして見ていた。

やけにあつさり混ぜ終わつたな、と思つたら、今度は手慣れた様子でフライパンを温めだした。「マサキ、お茶の用意して」と言われたので、ヤカンに水を汲んでもう一つのコンロに置いた。皿を用意したりテーブルの上を片付けたりしていると、いつの間にかホットケーキが焼き上がつたようだ。

どん、と黒い皿の上にのつけられたきつね色のケーキを見て、真咲は思わず「わあっ！」と声を上げた。

「す、す、これどうやって作ったの？」

まるでパッケージの見本の様である。表面はつるつるとしていて穴がほとんど開いておらず、型でも使つたかのように分厚い。自分で何度も作つたこともあるが、このように完璧に近い形で焼き上がつたことなどまずない。

「あんまり混ぜすぎるのがポイントかな。あとは弱火でじっくり焼くこと」

行成が得意げに答える。しばらく出来映えを眺めていると、行成は「そんなにか？」と苦笑してそれをナイフで二つに分けてしまつた。

片方を別の皿にのつける。バターをその上に落としてから、行成

がこちらを見た。

「はい」

「ごく自然に大きい方を差し出されたので、真咲は「いいよ、そつちもらうよ」と断った。すると彼は早々にケーキをパクつきながら言った。

「男同士で遠慮なんかすんなよ。たくさん食わねーと大きくなれねーぞ」

……やっぱりな、と真咲は思った。行成は自分の性別を誤解している。初めて会ったときから異性に対するにしては（いくら子供とはいえ）ぞんざいな態度だとは思っていたが、それは同性に対する気安さから来るものだつたらしい。

確かに自分の服装は男の子に見えなくもないが、それでも半分ぐらいたる人はちゃんと気づく。それなのにこの人は、自分が男子児童だと信じて疑いもしていないようだ。今日のラングドセル姿を見て決定的になつたのかもしれない。

だからといつて今ここで訂正するのも……と思つ。自分が女だと知つたら妙な空気になりそうだし、ヘタしたらこのまま追い出されかねない。外はまだ雨が降つてゐる。せめて今日ここから出るまでは知らんぷりを通しておくことに決めた。

「ユキナリさん」

「あ?」

「ホットケーキ美味しいね」

にこにこしながらそう言うと行成も同じように頷いた。

穏やかな時間が流れる。行成が幸せそうにモノを食べる様子を見

てこると、じゅらの心まで暖かくなつていいくよつだ。
騙している、という気持ちほんの少しあつた。

藍色（4）

行成が食器を洗つて いる間、手持ち無沙汰になり部屋の中を見回した。

そこで、机の脇の壁に貼つてあつた図面に目がとまつた。

大きな用の写真だ。さつきまでは背中を向けていたので貼つてあることに気が付かなかつた。夜空に浮かんでいるそれには、各クレーテーごとに線がひつぱつてあって英語で名前が書いてある。

何気なくとそれを見ていると、いつの間にか洗い物を終えたらしい行成がすぐ後ろに立つていた。

「なに、これが気になる？」

「こんなものに興味を持つとは珍しい、と言わんばかりの口調だった。」

真咲は頷くと、静かに答えた。

「……用にはうちの父さんが住んでるんだ」

バカにされる、とは思わなかつた。この人は、きっと話を聞いてくれる。

案の定、行成は「はて」と首を傾げると、真咲に向かつて大真面目に尋ねてきた。

「どうじつこと？ オヤジ、宇宙飛行士なの？」

首を横に振る。

「去年、死んじやつたんだけど、亡くなる直前に『用に行つてくる』って言つてたんだ」

行成は一瞬顔を強ばらせたが、すぐに「ああ」と粗びきを打つて話の続きを促した。

「で、前まで住んでた所引き払つて4月にこっち来たばっかだから、この前は迷つちゃつて……」

「なるほどな。で、マサキ、兄弟は？」

「こる。けど、ねーちゃんは海外に留学してて、にーちゃんは仕事でどつかの島にいる」

沈黙が訪れる。行成は自分よりも過酷な境遇にいる年下の子供に對し、どういった言葉を掛けたらいいのか見つからないでいるようだ。

だけれども、真咲の方としても、特に同情を引きたかった訳でも、慰められたかったわけでもない。ただ、自分のことをもっとよく知つてもらいたかっただけだ。

真咲は気まずい空氣を打ち消すようにわざとちゅうちょると動き回つた。そこで、机の上に見慣れないガラス瓶を見つけ、それに近づいてから指をさした。

「ユキナリさん、これは？」

真咲の質問に、行成が「さん付けしなくていいよ」と前置いてから答える。

「これは『透明骨格標本』つていつて、サカナの身の部分を薬で溶かして、骨だけ取り出して色付けたやつだな」

「へー……、キレイ」

ガラス瓶の中には、見事に着色した魚の骨がぶかぶかと漂っていた。まるで透明な海を泳ぐ魚の幽霊のようなそれは、骨の色が青よりも濃くて闇に近い　　真咲の好きな藍色だった。

口を開けて見とれていると、行成が首の裏を搔きながら言つた。

「まだ試料あるけど、作つてみる？」

「これつて作れるの？」

「あ、ああ。これは『デカいから2ヶ月ぐらいかかつたけど、メダカみたいな小さいのなら2週間ぐら』でできるだ」

「どうやって？」

興味津々で行成を見上げる。すると彼はガラス瓶を手にとつて説明し出した。

「まずはその辺で釣つてきた魚をホルマリンに漬けてだな」

「えっ、生きたまま漬けちゃうの？」

真咲が急に驚いたような声をだしたので、行成は「しまった」と思いつつ返した。

「……一応。死んだのでもできるけど
「ふーん……。ちょっと可哀想だね」

そう言つ気持ちも分からなくもない。真咲はまだ「生き物の死」というものについて敏感になつていていたんだもつ。

行成にしてみても、標本を作る際ゆつくりと弱つていく魚を見ながら、済まないことをしていると気分を何度も感じた。

行成は「まあ、気が向いたらいつでも言えや」と言つて瓶を机の上に再び置くと、真咲に座るよう促した。

その後は、「好きなことしてろ」という行成の言葉通り、彼の部屋にあつた雑誌やマンガを勝手に読ませてもらつた。彼は難しい顔をしてラップトップの画面を睨んでいたが、真咲が「うわ」とか「えつ」などと本の中身に反応するたび、「どれどれ」と顔を近づけて真咲が読んでいたものを覗き込んできた。その行動がなぜか嬉しくて、大してウケたわけでもないのに大声で笑つたりもしてみた。まだまだ帰りたくないな、そう思つていたが、行成が壁に置かれた時計を見て、焦つたよつて口走つた。

「やべ、もうひとつ時間過ぎてつざ」

俺もいまからバイトなんだよ……とカバンに荷物を詰め始める。慌てたその様子を見て、真咲は時間を教えなかつたことをいたく後悔した。
追い立てられるよつとして玄関から出ると、行成が「ちよつと待て」と声を掛けってきた。

「まだ雨降つてるから、傘持つてけ」

白い柄のビニール傘を差し出される。行成は自身も靴を履きながら、カバンを小脇に抱えていた。

「それじゃ、今度返し……」

「いや、いいよ。それぐらいやるよ」

そう言つてドアノブに鍵つっこんで回した。ひどく急いるようだ、彼は「それじゃ」と言つと、真咲の方を振り返らずに駅の方へ早足でアパートの階段を駆け下りた。

紺色の大きな傘が遠くなる。完全に見えなくなると、真咲はため

息をついてビニール傘を拡げてアパート前から立ち去った。

雨は夜には上がり、都会の夜空にもぽつかりと円っこ月が昇った。

しかし真咲は、今日はいつもより月を見上げる気にならなかつた。

(『そんじゃ、わよつとお前うち来る?』)

行成の声が耳にこだまする。自分はその誘い通り、行成の家で何時間か過ごしてしまつた。

なんだかよく分からぬけど未だにドキドキする。だけどもつと、誰かに知られたら台無しになつてしまいそうな気がする。

だからこのことは、絶対に秘密にしたい。母親はもううん、友達にもおじさんにも、そしてお父さんにも

その日は、引っ越しきてから用に祈らなかつた初めての日になつた。

梅雨明けの街（1）

じめじめとした長い雨が上がり、本格的な夏のシーズンの到来を予感させるようにカラッと晴れ上がったその日の夕方、プールの授業で疲れた体を休めるため居間のソファで真咲がまどろんでいると、庭先からがさがさと物音が聞こえた。

慌てて飛び起きたと、庭に植えられたプラムの横にいつの間にか脚立が置いてあり、その実を何者かがもぎ取つてはバケツへと放り込んでいた。驚いて思わず声を上げてしまいそうになつたが、よくよく見ると、その果実泥棒は叔父の忠晴に似ている といふか忠晴本人だった。

掃き出し窓をガラリと開けて、庭へ出る。つっかけのサンダルを履いて脚立に近寄ると、叔父は真咲を見下ろして「おお」と破顔した。

「真咲、今年のプラムは当たりだぞ」

そう言つて赤い実をひとつ採つて真咲に手渡した。「食べてみろ」と言わされたので皮を剥いて歯をあてがう。ほんのりと酸味の漂う甘い果汁が口の中いっぱいに拡がり、寝起きのだるい体にしみこんでいくのが分かつた。

何か手伝うことはないか、と聞くと、実を拭いて並べるように言われた。台所へ一旦戻りキッチンペーパーを何枚か持ち出し、縁側に座つて作業にとりかかつた。

拭きながら熟した実とまだ青さが残つてる実を分けていく。脚立を移動し黙々とプラムをつみ取つている叔父は、会社帰りで疲れ果てていたつてよさそうなものなのに、實にいきいきとして見えた。母より7～8歳若い叔父は、「ジョージョー企業」に勤める「Hリート社員」なのだと誰かから聞いたことがある。背が高く彫りの

深い顔立ちで、「小さい頃から女の子の影が絶えなかつた」とは母の弁である。それなのに未だに独身で、早く落ち着いてくれればいいのに、と母はことあるごとに愚痴つていた。

叔父自身はマンション暮らしをしているが、庭いじりをするため、月に2～3度は真咲の家へ草刈りや肥料撒きをしに現れる。放置気味だったプラムの樹が見事結実するまでになつたのも、叔父の世話があつてである。（もともとこの家は祖父母のものだつたが、「年寄りに階段は堪える」とのこと）で、一人は現在公団暮らしをしている。一軒家をもてあましていたところに、娘と孫である真咲たちが収まつたという格好だ。）

真咲にしてみれば自分をからかつてくれるといろが少々苦手だつたが、度々会つているうちにそれも馴れてきた。親しくなれば、気さくでいい人間なのだ。

「ねー、おじさん」

叔父が振り返りもせずに「なんだ」と答える。

「今日も、家に帰つちゃうの？」

「……ああ。仕事がまだあるから。帰るよ」

「だったら、いつそのことどうちに引つ越してくればいいのに」

叔父は真咲の言葉に一瞬手を止めたが、「バカなこと言つてんな」と言つとすぐにプラムの採取を再開した。

しかし、今家には使つていらない部屋があるし、ここに住めば庭だって好きなだけいじれる。わざわざ別に暮らしているのが無駄なんじゃないか……と真咲は思うのだ。

真咲は「えー、でも」と付け加えてから、反論に出た。

「きっと、ガリレオだつてその方が喜ぶよ」

叔父の飼っている犬のことを持ち出す。狭いマンションでまきつと十分に走り回る」ともできないに違いない。叔父もあまり散歩に連れて行けないよつだし、もし一緒に暮らしていたら、自分が遊んでやることもできるだろう。

すると叔父は苦笑いをして答えた。

「いい歳こいた男が親とか兄弟と住むのも変だら」「でもさ、うちお母さんいないこと多っこしさ。いてくれたら嬉しいんだけど」「

それは真咲の本音だった。最近本格的に仕事に復帰した母は、夜勤などで長時間家を開けることも多い。

寂しい、と泣く歳でもないが、誰かが一緒にいてくれるのならそれがいい。ずっとといい。

脚立から真咲を見下ろしていた叔父は、ぽんと地上に降り立つと、プラムのぎつしりつまつた重そうなバケツを持って真咲に歩み寄った。

「なんだ？ お前がそんな」と言つなんて珍しいじゃないか。やつと俺の良さがわかつたか

はぐらかされて真咲は憮然とした。そんな彼女に構うことなく、叔父は予め用意していたらしいビニール袋へプラムを詰め始める。縁側に並べられたプラムをあらかた詰め終わると、それを指し示しながら真咲に言った。

「これはあとでジーランドピザさんの方に持つてってくれ

明日は母と祖父母の家で週一恒例となつてゐる食事会の予定だ。

その時に一緒に持つていけばいいだろ？。

しかしプラムの実はまだバケツいっぱいに残っている。叔父がその上のほうから「それじゃ、俺はこれぐらい」と3・4個だけ手に取つたので、

「残りは？」

そう真咲が尋ねると、叔父はさも当然とこうよつて、

「お前とか一ちゃんの分だ！」

真咲の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

ふたたびバケツの中へと皿を落とす。プラムは今にもこぼれんばかりに赤く熟したもの、まだ青く固そうなもの。さまざまな色合いのものがあつたが、見えているのはごく一部で、一体この中に何個あるのか真咲には見当も付かなかつた。

「一人じゃこんなに食べられないよ」

せつと母と自分だけでは食べきる前に腐らせてしまひ。せつかく収穫したのに無駄にしてしまうのは可哀想だ。

叔父にもつと持つて行け、という意味を込めて言つたはずの台詞は、またもや飄々とした調子ではぐらかされた。

「じゃあお前の友達にでも持つてけば。喜ぶとゆつよ」

「友達……」

言われても思い浮かばない。こんな庭先で採れた果実を学校の知り合いに押しつけたところで、迷惑がられるだけな気がする。

叔父が「いい仕事をした」とばかりに大きく伸びをした。夕陽を

受けて庭の地面に落ちた長い手足の影が、ある人物のそれを彷彿とさせた。

(あの人だつたら、よろこんでくれるかな)

プラムの入つたバケツを台所に運ぶと、そのうちの10個ほど、あまり傷の付いてない見栄えのいいものを選んで紙袋に詰めた。

自分の部屋に駆け上ると、クローゼットを開け、誰にも見えないように置いてあつたビニール傘を取り出した。

突然の雨に降られたあの日、再会した親切な青年から借りた傘。

「やるよ」と言われたが、いつか返しに行こうと思つていた。だけど、手放してしまつたら今度こそ本当に縁が切れてしまいそうで行けなかつた。

(これのお礼です、つて言えば、また少しはお話できるかな)

ビニール傘の柄をぎゅっと握りしめる。先日見たことわざ辞典に載つていた「思い立つたが吉田」という言葉を思い出した。

この気持ちが何なのかは分からぬ。だけれど、あの男の人と一緒にいると、ホッとするし、楽しい。遠足の前の日みたいにわくわくする気分。ずっと続いてほしくて、時計が止まってしまえばいいつて本気で思つた。

プラムの酸味のある甘い味が、口の中に蘇ってきた気がした。

梅雨明けの街（2）

数週間前の記憶をたどつて、くたびれたモルタル造りのアパートの前までやつて來た。

一旦家に帰つたからランドセルはない。手には以前借りたビニール傘と、袋いっぱいにつめられたプラムの実だけを持っていた。扉の横のチャイムは「」のマークが薄汚れて消えかかっていた。繋がつているかどうか分からぬそれを恐る恐る押してみると、中から「キンコーン」というような古めかしい音が聞こえてきた。

しかし、扉の内側からはそれ以来一切物音がしない。

「……やつぱいないか」

ため息をついて俯いた。やはり大学生といえど、平日のまだ陽も沈みきつてないこの時間に家に居ることはなかつたようだ。

扉に背を向けて寄りかかる。行成の住んでいるアパートは幸いなことに大通りから外れた静かな住宅街にあり、その前を通る道路は交通量が少なく、たまに買い物帰りの主婦や散歩をする老人が歩いて横切る程度である。真咲は「お腹が空くまで待つて来なかつたら帰ろう」と決めて、そのまま部屋の前に座り込んだ。

向かいの家の垣根から、空に向かつて真っ直ぐ伸びるタチアオイの木が見えた。その中心に沿つて絡みつくように連なつて咲いている赤い花は真夏の太陽に似ていて、これから来る季節を真咲に嫌が応でも思い起させた。

本でも持つてくれれば良かつたな、と思いつつ行成を待つ。チリ・チリ……どこかで揺らされている風鈴の音だけに耳を澄ませていた。

そのうち西の空にたなびく雲が次第に赤みを増してきた。そういう

えば、往来を行く人の中にも、会社帰りとおぼしき人の姿がちらほら混じりだしている。時計を持つていないので時間は分からぬが、もう1時間以上は経つてゐる気がする。

道を歩いていたひとりの老婆が、アパートの前で動かない真咲の姿を見て、不審げに振り返った。もしかしたらずっと真咲がここに居ることに気づいたのかもしれない。

(……変に思われたかな)

そう思うと途端に焦つてくる。お巡りさんでも呼ばれたら大変だ。早く帰らなきや、と腰を上げた瞬間だった。

突如、部屋の中からがちゃがちゃと金属が擦れるような物音が聞こえた。

咄嗟のことで身を強ばらせていると、それまで自分がもたれ掛けつていた扉が出し抜けに開いた。

「あつ！」

玄関を開いた人物は、すぐ外に立つていて真咲を見て飛び退いた。

「お前、ずっと待つてたの？」

真咲は行成の問いに頷くこともできず、

「えーと、さつきチャイム鳴らしたんだけど、出でこなったから

と、言い訳がましく答えた。

行成はうつむいたように口元を歪めた。以前会つた時よりも表情が乏しく、顎や鼻の下には点々とた髭が生え、疲れているのか目の下が落ち窪んでいた。縫れた半端な袖丈のTシャツにスウェット地

のハーフパンツといつ出で立ちで、まるでさつき起きたばかりです、と言つような格好だった。

……いや、本当に今の今まで寝ていたのかもしれない。

ああ、悪い、と行成は頭を搔くと、真咲の顔をじっと見つめた。その体からは、ほんのりと酒の匂いがした。

「これ、ありがとうございました」

しじるもじるになつて傘を差し出すと、行成は困惑したように顔を俯けた。

「そつか。そんなの玄関の前に置いてつてくれればよかつたのに」「あ、あと、この前のお礼に、これ持つてきたから」

「なんだこれ。梅？ 桃？」

行成は真咲に渡された紙袋を開け、視線を落とす。

「プラム、だよ。うちの庭先で採れたんだ」

ふーん、と頷く。玄関の扉が再び閉じられていく。やはり突然押しかけたのは迷惑だつたかと後悔していると、狭くなつたドアの隙間から、行成の急いたような声がした。

「とりあえず中入れば」

「えつ？」

「食つてくだら？」

あまりにも当たり前の様な態度に、真咲は多少面食らいつつも、遠慮がちに答えた。

「でも、ヨキナリに持つてきただし」

「いや、ひとつひとつで食つても美味くねーじゃん。一緒に食お'ば」

長年連れ添つた友達のように気安い物言い。それに行成の顔色が悪いのも少し心配になり、真咲は再びアパートの玄関を跨いだ。実は家で飽きたほど食べた、ところは内緒にしておくことにした。

部屋の中へ入ると、酒の香りがより一層濃く漂つた。

それもそのはず。テーブルの周囲にはビールの空き缶がいくつも転がっており、さきいかやかまぼこなどの包み紙も散乱していた。以前訪れたときも整頓されているとは言い難い部屋だったが、今回のそれは明らかに「汚部屋」と言つていい有様だった。

「うわー……、ひつやひどいな」

自室惨状を改めて田の辺たりにし、行成が呻く。

「何かあつたの？」

「いや、まあ……、大人にはいろいろあるんだよ」

バツが悪そうに顔をしかめると、行成はテーブルの上に開きっぱなしだった白い紙と封筒をぐちゃりと握りつぶし、食べ散らかしもろとも部屋の隅にあつたゴミ箱へと放り込んだ。

この部屋の状況を見ても、だらしない人間だ、とは思わない。彼の言つとおり、いろいろと子供には分からぬ事情というものがあるのだろう。真咲は彼に倣つて、空き缶などを適当に分別してビール袋に詰めていく。

あらかた片づくと、行成はラムを切り分けるために台所へと向かつた。

手持ち無沙汰になつた真咲は、ついでに部屋中に散乱していた本を本棚に並べ直した。余計なお世話かな、と思いつつ脱ぎっぱなしの衣類を畳んで、ぐちゃぐちゃになつた布団もきちんと皺を伸ばした。

皮を剥いたプラムを手にした行成が部屋の中に戻つてくると、「うわ、すげえキレイになつてる」と驚嘆の声を上げた。

冷えた麦茶と、剥きたてのプラムがテーブルの上に並べられる。そのうちの一つにフォークを刺し、滴る果汁をトントンと切つてから、口へ運んだ。

顎を動かして飲み込むと、行成は相変わらずの無表情のまま呟いた。

「ああ、これが。昔ばーさんの家で食つたな」

「あ、ホントに？ おばあちゃんも家でつくつてたの？」

「いや、多分ご近所さんからのお裾分けだつたんだと思ひ。果物やら野菜やら、いつもたくさんもらつてたよ」

「へー、羨ましいね。どの辺に住んでるの？」

「北陸の山々中だよ。ガキの頃は毎年夏になると行ってたけど……。最近は顔も出してねえな」

瞼を伏せて遠い目をすると、「まあ、こんなんじや合わせる顔もないけど」と自嘲氣味に笑つた。

……それは、どういう意味なのだろうか。そういうえば、初めて見たときもベンチの上にうずくまつたりして、何か深刻な悩みを抱えていそうな雰囲気だつた。

だけど、自分が聞いていいものか……、と考えていると、先に口を開いたのは行成の方だつた。

「お前はいいよなあ

「えっ？」

「やりたいこと、いっぱいできるし、まだまだこれからだもんなあ

真咲はムツと顔を顰めた。正直、小学生だつてそこまでお氣楽で

はない。特に自分は、父を亡くし友達も出来ず、羨ましがられるような境遇にはいない。

反論しようとするより先に、行成は「『めん、なんでもない』と言つて再び俯いてしまった。

生暖かい風に乗つて、開け放した窓から子供達のはしゃぐ声が届いた。酸っぱいプラムを食べきつてしまつとすることが無くなり、気まずくなつて真咲は話題を振つた。

「やつにえは、どいか出掛けるとひじやなかつたの？」

先ほどのこと。家の中から勝手に扉が開いた。あれは外に用事があつたからではないのだろうか。この前のよつに自分のせいにバイクに遅れたりしたら大変だ…… そう思つて尋ねる。

「あ、ああ。夕飯の買い出しだし行こうと思つてたんだわ。日も暮れそつだし、そろそろ行くか」

大した用事でなくてよかつた……。そう胸をなで下ろしたのもつかの間、行成は麦茶を飲み干すと、急にテーブルの前から立ち上がつた。なんだか唐突な行動である。呆気にとられた真咲は、慌てて背中に向かつて声を掛けた。

「どこ行くの？」

「駅前の商店街。あの辺、総菜とかが安いんだよ」

部屋の中を「財布、財布」と、つわづわしている行成に、真咲は思い切つて聞いてみる。

「着いてつていい？」

行成が真咲を振り返つて、「ああ」と頷いた。

真咲は着てきたパークーを急いで羽織ると、運動靴を履いて行成より先に玄関を出た。

ふと空を仰ぎ見ると、太陽の沈んで行く方角に、一つだけ光る星を見つけた。

月は、まだ出でていない。

梅雨明けの街（4）

駅前から数100メートルに渡るアーケード下の商店街には、飲食店をはじめ洋品店、楽器店など、大小様々な店が連なっている。夕暮れ時ともなれば行き交う人々の波で活気に溢れるのだが、今日は特に賑わっている気がする。

その理由をいち早く察知した行成が、隣を歩く真咲に向かつて呟いた。

「もう夏祭りやつてんのか。早いな」

通りの真ん中に、軽食などの露店がいくつも出店している。普段は母親に止められているためあまり買い食いなどをしない真咲だが、別に何も買わなくて同じような催し物を見ると心が躍ってしまう。

尤も、真咲よりもこの雰囲気を楽しんでいるのは、彼女よりうんと年上の、隣を歩く青年のようだつたが

「チョコバナナかりんご飴、食う？」

弾んだ声で尋ねられ、真咲は首を振る。

「お母さんがご飯作ってくれてるから、今日は大丈夫」

それに、家の近くまで送つてもらつたり、傘を貸してくれたり、お世話になつているのはこちらの方なのに、これ以上恩を受けることはできない。

すげなく断られ、行成は不服そつと口をとがらせた。

「そつか

……もしかしたら、お裾分けでももう算段でいたのだろうか。行成のこういうところが、自分の知っている他の大人の人たちと違つて、たびたび自分を戸惑わせるんだろうな、と真咲は思った。

前方から綿菓子を持つた5・6歳ぐらいの幼児が突進してきた。ぶつからないようにひらりと身を避けると、行成とはぐれてしまいそうになつた。

行成が「こっちだ」と言つて真咲の手を取る。

彼の手のひらはがさがさしていて、大きく、それでいて少し冷たかつた。

* * *

そのまましばらく歩いてくると、天ぷら屋の前を過ぎたところで行成は急に足を止めた。

「おっ、金魚すべー」

半畳ほどの浅い水槽の中に、オレンジ色に近い赤の金魚が、長い背びれをひらひらと揺らしながら何匹も泳いでいる。よく見るとたまに黒いものも混じつていた。真咲よりもいくらか年若い女の二人組が、真剣な表情で網を片手に水槽の前にしゃがみ込んでいる。「」の子達は上手くすべえるかな、と後ろからその様子を伺つてゐるが、金魚を水槽の角に追いつめたところで、女の子達の網は無惨

にも破れてしまった。

「あー、残念」

まるで自分のことのように悔しそうに行成がため息をついた。

女の子達は「はい、オマケ」と店番らしき中年女性から一匹ずつ金魚をもらひつと、満面の笑みを浮かべ、そのままびにかへと駆け出した。

行成が尋ねる。

「お前、じつこの得意？」

「やつたことないからわからんない」

そうなのだ。年の離れた兄姉や両親など真咲の周りは合理的な考え方をする大人が多く、こいつた遊びを「やつてみたい」となどと口に出すのはなんとなく憚られる感じがして、結局一度もやらないままでこの年になってしまった。

行成は「あ、そうなの」と意外そうに眉を動かして、水槽の前に座り込んだ。

ポケットから財布を取り出ると、お金と引き替えに綱を受け取り、その綱を真咲の方へと差し出した。

「はい」

「えつ」

「いいからやつてみなつて。何事も経験だよ」

いやにせとしながら手に綱を押しつけてくる。断り切れず真咲は、行成の隣にしゃがんで水槽の中を睨みつけた。

一匹、周りの魚たちに較べて動きの鈍い奴がいた。所狭しと泳ぎ回る金魚が多い中、そいつだけのろのろと白いプラスチックの池を

漂っている。

それに狙いを定めて、壁際に寄つた隙に網をくぐらせた。捕れた！と喜んだのも一瞬、案外大きかつたその金魚はつよい網の上を跳ね回り、お碗の中に入れる寸前でぼとりと水の中に落ちてしまつた。

「……やつぱりダメだったか

あともう一歩のところだつたのに。逃げた金魚を未練がましく視線で追つてしまつ。

名残惜しいけど仕方がない。諦めようとしたとき、隣の行成が急に袖を捲つて宣言した。

「よし、今度は俺がやる

……結局、自分がやつてみたかつただけではないだろうか。それなら最初から自分だけチャレンジすればいいのに、と思ったが、真咲も生まれ初めての金魚すくいを結構楽しんでいたので、何も言わず行成の狩りを見守つた。

隣の行成は、先ほどまでのどんよりした表情が一変、今は活き活きと目が輝いている。

行成は水槽に向かつて前のめりになると、網と鉢を持って口を固く結んだ。

網を水面すれすれの所で待機させてタイミングを伺つ。Hサと勘違いしたのか上部に何匹か集まつてきた。キツと皿つきを鋭くさせると、素早い動きで金魚を水の中から攫つた。

間髪入れずにお碗の中へと滑らせる。

「やつたー！」
「よしあー ゲットー！」

行成が笑顔でガツッポーズを作った。

掬うと同時に網は破れてしまつたが、お碗には今しがた捕獲したばかりの金魚が一匹、ぴちぴちと動いている。

「すうーい、やつぱ上手だね」

「いや、そんなんでもねえよ」

謙遜するように鼻をならす……が、顔は嬉しくて仕方がないといつたように緩んでいい。「の」の形をした奥二重の眼が、ますます細く狭められた。

「あー、赤いのだけ狙つてたのに、おまけがいる」

お碗の中を覗き込む。田端でだつたのは赤い金魚のみで、黒くて一回り体の小さいものは巻き添えを食らつてしまつただけらしい。金魚にとつては災難かもしれないが、自分たちにはラッキーと言えるだろう。

それを店番に手渡した。一匹の金魚は透明な巾着状のビニール袋に移し替えられた。

立ち上がりて店番に礼を言ひつと、行成は金魚の入つた袋を、じくへ自然に真咲に差し出した。

「はい」

「えつ……、もうつていの?」

意外な行動にきょとんと顔を見上げた。あれだけ一生懸命やつていたのは、よっぽど金魚が欲しいのかと思つて見ていたのだが、そうではないのだろうか。

「ああ。俺、ズボラだし、きつと多分すぐ死なせっちゃうから。お前が持つて帰つて世話をしてくれよ。名前でも付けてさ」

あの白毛の散らかりぶりを見れば、生き物を飼える状態じゃないというのは分かつてもらえそうなものだが。

それでもまだ納得できないでいる様子の真咲に、行成は背を屈めて顔を覗き込み、その手をとつて無理矢理ビニールを握らせた。

「んで、子供が生めたら引き取るからや。頑張って育てるんだ」

急に手を掴まれ、耳の後ろがカツと熱くなる。照れていることを気づかれてくなくて、「わ、わかった」と額くしかできなかつた。ビニール袋を田の高さまで持ち上げる。水の中で、鮮やかな朱赤と濁りのない漆黒の小さな生物が絡みつくように踊っている。

「それじゃ、赤い方がうめぼしで、黒い方がこんぶ
「お前、案外食い意地はつてゐのな」

真咲が直感的につけた名前を、どっちもおにぎりの具だろ、と行成は声を立てて笑つた。

行成は近くの弁当屋で酢豚とサラダを選んで、当初の目的だった夕飯の買い出しを済ませた。

他愛ないことで笑いながら、日の暮れてしまつた街を子供の歩幅に合わせてゆっくりと歩く。行成の髪の生えた白い肌とシャツが、夕闇に溶けずに浮かんでいた。

家の途中まで着くと、「またね」と手を振つて別れた。手にぶら下げた金魚が増えたときのことを想像しながら。そうなつたら真つ

先に会いに行こうと決めた。

その日の夜、真咲は夢を見た。

じつじつした岩の多い海で、服を着たまま、尾びれの付いた足で縦横無尽に陸へ向かって泳いでいた。

水の中では、その日捕まえた一匹の金魚と彼らとよく似た子供たち、それと骨だけの青い魚がたくさん泳いでいて、何回もすれ違った。

田指す場所に待っている人を焦がれながら、息をしようと顔を上げると、外は闇に包まれていた。

空には大きな星が半分だけ浮かんでいた。深い青色を地に、緑と白のマーブル模様の星。あれはどこかで見たことがある。あの星は地球だ。だとしたら、ここは

そう考えた瞬間、鮮やかな夢は終わった。

最後の夏休み（1）

ミーン、ミン……と威勢のいい蝉の鳴き声がやたら耳に付く。もしかしたらすぐ近くのベルンダで鳴いているのかもしない。

今日の真咲は、学期の終了に伴う三者面談をするため、母親と共に学校へ来ていた。

最近では一学期制の小学校も多いと聞くが、真咲の通う学校は転校前も今も三学期制だった。従つて、夏休み前のこの暑い盛りに、通知票を受け取ることになる。

「……では、卒業後は私立の中学校への進学を予定されていると」

前に座った担任教師がハンカチで額の汗をぬぐう。クーラーのない教室では旧型の扇風機が首を振り続けているが、それでも一向に涼しくはならない。

母親よりもいくらか年若い女性の教師は、他の児童たちからは「いい先生」と言われ人気があるようだ。もっとも、教え方がうまいとか尊敬できるとかではなく、ただ「怒らない」「怖くない」から他の教師よりも自分たちが好き勝手なことをしやすいというだけではないだろうか、と真咲は思う。

珍しくスーツを着込んだ母親が答える。

「ええ、本人もそう望んでいるようですし」

望んでいるわけじゃない、そう反論しかかった。

自分は、期待に応えるためにそうするだけ。確かに、公立の中学校に進学すれば大部分が今の同級生と重なってしまう。そういうた環境から逃げたいというのもあるけれど、大部分は「お父さんの子供なんだだから勉強ぐらいできなきゃ恥ずかしい」という母親の発破が

あつてこそだ。

担任教師は人の好さをうなづくらした顔を崩して、笑顔を作った。

「真咲ちゃんの成績であればどいでも狙えると思います」

母親が勝ち誇ったようにニヤリとした。受け取ったばかりの通知票に田を落とすと、最高評価の「**」**がずらりと並ぶ。（と、言つてもこの学校は「**、**、**、**」の3段階のため、全て「**」」を取るものもさほど難しいことでは無かつたが。）**

各教科の項目¹⁾との小テストでは満点以外とつたことがないし、先日受けた模擬試験でも何校か挙げた志望校はすべて合格の範囲内だった。もともと記憶力は良く地頭も悪くなかったが、ここ最近は、転校前まで外で遊んでいた時間を全て勉強に宛てて努力もしている。がんばってね、と教師が真咲の目を見て励ました。照れくさい半面、今もすでに頑張っているのにこれ以上どうしたらいいのかという戸惑いを覚える。

「それでは以上になりますが、何かご質問は

教師に尋ねられ、母親が「いいえ」と首を振る。

ありがとうございました、とお互いに頭を下げて立ち上がり²⁾としたとき、教師がこれだけは、とばかりに付け加えた。

「あと、2学期には、もつと友達ができるといいね」

急に顔が熱くなつてくる。真咲は小さな声で「はい」とだけ答えると、母親に急かされて教室を後にした。

廊下に出ると、母親は恥を搔いた、とでも言ひよつに真咲を睨みつけた。

* * *

強い太陽光に照らされ、濃い影が歩道に落ちる。しかし明後日から夏休みだというのに一向に気分は晴れない。

それまで無言で歩いていた母子だったが、国道を横切る歩道橋を降りきつたところで、母親が業を煮やしたように口を開いた。

「あんた、まだ友達作ってないの」

否定する」とも頷くこともできない。喋る相手なら、いる。クラス委員の女の子は真咲が完全に孤立しない程度には話しかけてくれるし、他の子からもあからさまにいじめられている訳ではない。

だけど、それを友達と呼んでいいのかは分からぬ。それに、「友達を作る」という言い方になんとかモヤモヤする。

友達は無理矢理作るものじゃなく、自然となるものなはずだ。真咲が言い返せずにいると、母親は一層苛立ちを募らせた。

「なんでもうと周りに合わせられないの？ なんでそんなに頑固なの？」

合わせようとしてない訳じゃない。

ただ、きっかけが掴めないんだ。多くの女の子が盛り上がりしているテレビや漫画や恋愛の話題 それらにどうしても興味が持てないから、話しかける糸口が見つけられない。それだけのことなのに、どうしてそんなに大罪を犯したかのように責められなければいけないのか。

それに　自分でつて、前にいた場所では「いつまで経っても馴染めない」とこぼしていたではないか。周りに合わせられないのは同じはずなのに、どうして分かつてもうえないのだろう。

上手く言い表せずにもじかしく唇を噛みしめる。そんな真咲を一瞥すると、母親は吐き捨てるように冷たい声で言つた。

「勉強だけ出来たつて、あんたみたいな子は将来苦労するわよ」

耳の後ろが殴られたかのように熱くなる。

（せっかく一生懸命頑張ったのに、少しも褒めてくれないの？）

分かつてゐる、世の中にはいくらいい学校を出ても、暗い人生を送る人間もいる。その逆に、多少勉強は出来なくとも、いい仲間に囲まれて、充実した一生を過ごす人もいる。母は、自分がその前者になると言いたいのだろう。

だけど、つい先刻「成績がいい」と言われて母親も喜んでいたではないか。それなのに、どうして手の平を返すようなことを

ギイ、と家の門をくぐる。炎天下の中歩き続けたせいで汗だくだ。だけど、田尻から流れたのは、汗ではなかつた氣がする。

母親は疲れた、と言つて冷房の中少し横になると、昼も食べずにすぐに仕事へ向かつてしまつた。残された真咲は自らそうめんをゆでて腹を満たした。

シャワーを浴びて二階の自室に上がり、壁際の5段チヨストへと歩み寄つた。

ここには先日商店街の屋台で取つた一匹の金魚の入つた瓶が置いてある。真咲はこれら眺めるのが好きだった。小さくても一生懸

命生きてこたる彼らを見ると、自分も頑張りつゝ思われる。
ところが

「ほんと、うめぼし」

様子がおかしいと思つたら、一匹はぱつぱつと膨らんだお腹を上にして水面に浮かんでいた。

瓶を叩いても搖すつても動かない。……既に息絶えているのだ。

なんてことだ、と目の前が真っ暗になる。小さい瓶の中では可哀想だろうと、終業式が終わつたらすぐお年玉を持つてペシトショップに行こうと思っていた、その矢先だ。

真咲はしづらへ呆然と佇むと、居ても立つても困られず部屋を飛び出した。

最後の夏休み（2）

部屋のチャイムを2回連打されたあと、扉を強く打ち付ける音がして田が覚めた。

「誰だようせえ……」

昨晩からネットサーフィンをしていたらいつの間にか寝ていた。クーラーを掛けっぱなしにしていたせいか喉が痛い。また、テープルの前で変な姿勢で寝ていたためか、少し動くと体中の関節が悲鳴を上げた。

外にいるのは新聞か宗教の勧誘か何かだろうか。どうせ自分が中に居るのを知っている訳では無かる。無視を決めこんで布団に潜り直したとき、ガラッと部屋のガラス戸が開いて、何者かが駆け込んできた。

「ユキナリ！」

名前を呼ばれて慌てて飛び起きる。

「うわっ、なんだ？」

一瞬強盗でも押し入ってきたのかと肝を冷やしたが、そうではなかった。田の前では瞳を真っ赤に充血させた真咲が息を切らしている。

勝手に上がり込んだ非礼を責めるのは後にして、「どうした、何かあつたんだ」と尋ねる。きっと、何か大変なことがあったのだろう。そうでなければ、こんなことをするわけがない。

真咲は行成の横にぺたんと座ると、切羽詰まつた悲痛な面持ちで

はやくつた。

「あのね、この前とつてもうつた金魚」

「うん」

「今日家に帰つたら、死んじゃつてた」

震える声でそつと上げた真咲の肩を、行成は軽く撫でぬいた。呂に

「そつか……。残念だつたな」

なんだ、そんなことと無碍にはできない。自分にも、同じ経験があるからだ。

命のあるものいつか必ず息絶える。特に動物は人間よりも長く生きられないから、そばに置いていれば、早かれ遅かれ別れの時は訪れるのだ。

だけどそれが解っているからといって、ショックが減るわけじゃない。よくあることだ、と言つても何の慰めにもならない。今悲しんでいる人間にとつて必要なのは、それを悼み、気が済むまで待つていてやることなのだから。

ちょっと待つてろ、と言い残して台所へ向かう。流しの水で適当に顔を洗つてから、グラスに氷を入れ、冷えた麦茶をそれに注いだ。麦茶を持つて部屋に戻る。グラスを差し出すと、真咲は頬に滴る汗か涙か分からぬものを拭い、麦茶を半分飲み干した。

「いきなり迷惑かけてすみません」と行成に向かつて頭を下げる。喉を潤すと真咲は少し落ち着いたようで、すみません」と行成に向かつて頭を下げた。

全く、この年頃の子供というのは解らない。案外しつかりしてい
るかと思いきや感情が脆く、幼さを見せたと思ったら急に大人びた

表情をする。そういうえば、自分にもこんな頃があつたのかな、と懐かしく思い出した。

グラスに残つたもう半分の麦茶をすべて飲みきつてしまつと、真咲は立て膝から正座へと急に姿勢を変え、畳に手を付いて行成の顔を真正面から見据えた。

「コキナリ、お願ひがあるんだ」

なんだろう、と胸がざわづく。赤の他人の自分に出来ることなどあまりないとと思うが……。

真咲は机の上を指をして言つた。

「これって死んでるやつでもできるんだよね」

ああ、と答える。真咲の指先には以前披露した透明骨格標本の入ったガラス瓶が置いてあった。

そこで行成にも、真咲がわざわざ家を訪れた理由に気づくことができた。

「こんぶといめぼしで、これ作りたい」

真咲の切れ長の瞳が、自分を射抜くように見つめてくる。

「結構めんどくさいけど、本当にやるの?」

「大丈夫、絶対やりきれる」

「夏休みつぶれちゃうけど、いい?」

「いいよ。コキナリさえよければ。だから、お願ひしますー。」

強い意志を持った視線に押され、「ダメ」と断ることはできなかつた。

次の日の午後、終業式を終えた真咲が、さつそく金魚の亡骸を持つてアパートに現れた。

台所に一人並ぶと、流しの下から奥の方にしまってあつたホルマリンの瓶を取り出す。以前標本を作つた際に化学系の大学の友達より分けてもらつたものだが、また使うことになるとは思つていなかつた。

「それじゃ、やるか」

真咲がゆつくりと頷く。換気のため窓を開け放しているせいいか、外の音がよく聞こえる。

「ちょっと辛いかもしないけど……いいな」

まずは見本を見せるため、黒い方の金魚の腹にカッターを宛てて腹を開いた。

真咲は一瞬「うつ」と顔をしかめたが、すぐに真剣な目に戻り行成の手元を注視した。

行成からカッターを受け取ると、真咲は赤い金魚の体に切れ込みを入れた。

それからおおぞらぱに内臓を掻き出す。そんなもんでいいよ、と言つと真咲は持ってきたデジタルカメラに金魚の姿を収めた。

なんでこんなもんを撮つてるのだろうかと不思議に思つて真咲の横顔を見つめていると、真咲は真面目な顔で答えた。

「せつかくだから、夏休みの自由研究にしてみようと思つて」

なるほど、と思わず感心してしまった。この手の実験要素のあるモノづくりは、自由研究の課題にぴったりだろう。転んでもただでは起きない芯の強さを、小さな子供の中に感じた。

行成は手順書をペラペラとめぐりながら真咲に言った。

「そんで、次は固定。ホルマリンは危ないから、必ず手袋すんだぞ」

真咲は透明なビニール製の手袋を手にはめると、金魚の体をホルマリンの入ったタッパーへと沈めた。

すぐに蓋をする。あとは、このまましばらく放置である。真咲が尋ねる。

「どれくらいかかるの？」

「大きさにもよるけどこれぐらいなら固定に3日4日……、一応毎日チックしたほうがいいかもな。そんで、全部完成するまで1ヶ月ぐらい」

「じゃあ、また明日きてもいい？」

特に断る理由もないのに「いいよ」と答える。真咲は利発な子だから、こちらが構つてやれないときは空氣を読んでくれるだろ。

こうして、真咲の小学校最後の、そして行成の学生生活最後の夏休みが始まった。

途切れた放物線（1）

じりじりと焼け付くような日々が続く。真咲は毎日の様に行成の部屋にやつてきた。標本作りに使う試薬は劇物が多く、小学生に保管させるのは危険だと判断し、実験はすべて自分の家でやらせることにしたからだ。

金魚の様子をみてすぐに帰る日もあれば、本を読んだりテレビを見たり簡単なものを作つて食べたり。真咲が「ルールを知ってる」と言うので、一人で将棋を指したりすることもあった。

我が家を言わずあまりひねくれたところのない性格の真咲は、行成の生活にすっと馴染んできた。

（まるで、全然吠えない犬でも飼つてるみたいだな）

「ちらが何かを言え好奇心に田を輝かせて話を聞いてくれる、従順で素直なペットのよう。物覚えもいいから、暇つぶしに話す相手としては丁度いい。

それに、「お世話になつてるから」と言つて皿洗いや部屋掃除などを手伝ってくれる。お陰でここにこのところ不規則でだらしなかつた日々が、そこそこまともになつてきた。

だけど、気になることがある

真咲はテーブルの向かいで彼の家にあつた「ブラック・ジャック」の単行本を黙々と読んでいる。あどけないが涼しげで整つた横顔。どんなに暑い日でもパークーを着てくるのは何かのポリシーなのだろうか。

行成は真咲が一冊読み終えて次の巻に手を伸ばしたタイミングで、思い切つて尋ねてみた。

「あのやあ、マサキ」

「なに？」

真咲が顔を上げた。

「お前、せつかくの休みなのに友達と出掛けたりしねーの？」

ほほ連田のように家に現れる真咲。ちょこちょこと近況のようないい話をしたりするが、「今日××君と会ってくる」などと言ひ話は一向に出てこない。

行成としては、家に来られることが別に迷惑ではないのだが……。こんな歳の離れた人間と一緒にいるより、同世代の子供達と遊んだ方がよっぽど楽しいのではないか。

行成の問いかけに、真咲の顔色が一気に曇る。

「……友達、いないんだ」

意外な回答に、行成は「えっ」と言葉を詰まらせた。

真咲は一般的にいじめられるような人間のように鈍くさくもなし、むしろ頭がよくて冷静な、小学生であればクラスのまとめ役になるタイプだと思っていた。

確かに真咲は美少年然としていてやんちゃだった自分の小さい頃とはまったく異なるが、それでも友達がゼロというのは考えにくい。

「なんで？」と少し無神経かもしれないが聞いてみた。おそらく何か、理由があるに違いない。

「！」の前転校してきたばかりで、なんか、みんな話しかけづらいくて

……

言い訳をするように、小さな声で真咲が続ける。そう言えば、前

「じゃあ、学校のあとみんなで会つて遊んだり……」

「しない。みんな、塾とか習い事で忙しいみたい。こっちに来る前は、結構遊んだりしてたんだけど……」

行成は軽くため息をついた。

「そつか、なんだか勿体ねーなあ」

「……何が?」

「俺なんか、お前ぐらいいの時、毎日学校行くのが楽しくてじょーがなかつたけどな」

思い起こしてみれば、あの頃が自分にとつて一番幸せな時期だつたかもしれない。仲のいい友達とふざけ合つて、怒られて、大笑いして……。何の悩みも不安もなく、毎日がただひたすら輝いていた。

親の都合とはいえ、そのような時代を奪われてしまったというのはいくらなんでも可哀想だ。……かと言つて、自分に出来ることは何もないのだけれど。

「小学生だったら、昼休みに『一緒に遊ぼーゼー』って言えればたいてこぢうにかなるんじゃねえの?」

余計なお世話かと思いつつそつと忠告する。

真咲は「そうだね」と呟くと、「今日はお母さんが早く帰つてくれるから」と言って行成の部屋を後にした。

途切れた放物線（2）

その次の日、ふと思いついたことにより行成は夏期休暇中の大学へと赴いた。

ついでに就職活動で何か動きはないかと学生課を訪れる。が、特に手応えはなし。これは、と思つような外資系の大企業の会社説明会の案内もあつたが、既にそれは自分より一年卒業が遅い者にむけて発せられているものだった。

周回遅れになつてゐるのでは、と氣づかされた。しかし、最近では焦つてもしようがないと妙に開き直ってきた。どのみち、このような大手では自分のような者は採つていらないだろ。

中庭が見える木陰のベンチに座り、ぼんやりと景色を眺める。芝生の拡がる中庭では、まだ1・2年と思しき運動部の生徒たちが、ジャージ姿でストレッチなどをして体をほぐしている。

肘を付いてなんとなくその様子を見ていると、ポン、と肩を叩かれた。

「矢野っち」

振り向くと、入学以来の友人である遊座が佇んでいた。

行成と遊座は同じ法学部だった。彼はもう卒業しているため、会うのは実に久々になる。

学部時代はイケメンで慣らした遊座であるが、今の姿は髪は伸びっぱなしで頬は瘦けてやけにやつれて見えた。服もいつも最先端すぎないおしゃれで洗練されたものを身につけていたのに、今日はよれよれのカッターシャツにスラックス、それに足下はゴム草履という適当な格好である。

「ねつ、久しぶり」

引きつづながらそつと、遊座は力なく笑った。

「意外に元気そうだね」

それには自分でも驚いている。つっここの前まで廃人のような生活をしていて、傍から見ると今の遊座と同じような雰囲気だったと思う。遊座には内定取り消しのこともメールで伝えたから、そんなに堪えていない様子の行成が意外だつたのだろう。

(あいつのお陰かな)

毎日のように現れる小学生の姿を思い描いた。本来であれば彼女の一人でも作つて連れて歩きたいところだけれど、同性の・しかも年下の子供であれば、他人と会つて話す機会を持つといふのはかなりいい刺激になつてゐるようだ。

「じゃなんだから、と誘つて連れ立つた。学校の近くの安いファミレスに入り、リゾットを頼んで窓際の席へ座つた。
ふうふうと冷ましながら口へ運ぶ。遊座は昼間だとつにワインを飲んでいた。

遊座がワイングラスの細い柄を持つてゆっくりと回した。その薬指に細く光る装飾品があるのを見て、ふと思い出した。

「 そういやお前の彼女ってスクールカウンセラーだったよな。今のがキつてどんなもん? 」

「 なんでそんなこと聞くの? と尋ねられたので、兄貴の子供が今

度小学生」と適当に嘘をついた。

遊座の彼女は以前会ったことがある。小柄で細身の可愛らしい外見だが、頑固で我が儘の多い性格で、その子の進路を聞いたとき、「こんな娘がカウンセラーになつていいもんだろうか」と思ったものだ。

「やっぱね、上の学年に行くほど難しくなつてくるみたいだよ」

上の学年　たしかあいづは六年生だ。遊座の話が本当なら、最も大変な時期だろう。

「今は悩みを抱える子多いからね。いじめとか、家庭の問題とか」「へー。それって、頭のいい子でもなるの?」

「そういう出来はあんまり関係ないかな。いい子はいい子なりに、悪い子は悪い子の問題があるし。中には、プレッシャーで押しつぶされちゃって引きこもりになつたりする子もいるって言つよ」

それ以上は本題から逸れすぎかと思い、聞くことができなかつた。遠くを見つめる遊座の視線は、どこを彷徨つているのか分からない。羣衆のない態度に、何故か軽く胸騒ぎがした。

「そついえば、何で学校きてんの?」

「……俺、やっぱ大学院に行こうと思つて。成績表取りに来た」

「えつ……、じゃあ、会社は」

「……もへ、辞めてきた」

せつかく就職したばかりじゃないか、と口を突いて出でつになつた。

遊座は行成と違つて、優秀な生徒だった。鶏口となれど牛後となるなれの言葉通り、同じ大学に通つてゐるが「なんでお前たちに」

いるの？ もうと上の学校行けたんじゃない？」と聞きたくなるほどであった。

教授の覚えもめでたく、たしか推薦で大手の商社に内定をもらつたはずだ。

自分にとつてはなんとも羨ましい環境だが、彼にとつてはそつでもないらしい。

「俺たちが見てるところって、世界の一部でしかないんだよな」

当たり前だけども、と彼は細面の顔を歪めてはにかんだ。

「常識だと思ってたことが世間に出るとそうじゃなかつたり、憧れてたはずのことが、近くで見ると案外大したことないと知つたり……。まだ俺若いのに、このままこの中で腐つてしまつていいいのかな、つて。だから、俺はもっと色々なことが知りたいと思つたんだ」

遊座の言葉は漠然としていたけれど、なんとなく言いたいことはわかつた。

きっと、彼も相当悩んでこの答えを出したに違ひない。憔悴しきつた表情が、その証だ。

おそらく他にも理由は数え切れないほどあるのだろう。だけれども、今彼がそれを口にしたくないのであれば、敢えて聞いていただす必要もない。

「お前、意外に思い切つたことするよなあ」

「まあね。でも人生に正解つてないと思うんだ。自分が自分で選んだ道なら、何があつても受け容れようと思つて」

「後悔しない？」と尋ねると、実はもうじょっと後悔してると、情けなく笑つた。

次の日現れた真咲は、いつもより少し元気がないように見えた。

真咲は部屋に来るなり金魚の入ったタッパーに向かい、「デジカメを取り出した。今は水酸化カリウムで透明化をしているところだからなかなか変化が起こらないが、一応毎日毎の変化を記録して発表に使うつもりのようだ。この課程が一番時間のかかるところで、大きい被検体でやると数ヶ月かかることもあるらしい。金魚の様子を写真に収めると、行成は真咲に後ろから近づいた。

「なあ、これから何か用事ある?」
「特に、ない……けど」

真咲が口ごもるように答えた。
別に相変わらずヒマなことを責めようとしているわけではないのだが。
行成は真咲の緊張をほぐすように、二カツと笑った。

「たまには外、出てみない?」

真咲が「えつ?」と口を開けて行成の顔を見上げる。

「これ、借りてきたんだ」

足下に置いてあった紙袋に手を伸ばすと、中から少し年季の入っ

たグローブとボールを取り出した。
グローブをはめて拳を叩きつける。

「天気もいいしさ、キャッチボールでもしに行こうよ

真咲が少し戸惑いながらも「うん！」と元気よく返事をしたので、
行成は靴箱から運動靴を取り出して、真咲と一緒に外へ出た。

途切れた放物線（3）

高速道路の高架下、金網を張り巡らされた通称「鳥かご」の中にいる。

夏休み中だが田中のせいか他に人もいない。これも少子化の影響なのだろうか。

「まずは何にも考えずに投げてみようぜ」

ぎじちなくグローブをはめた真咲が、行成に向かつて腕をしならせた。

「あー、そうそう。結構上手い」

パシッと小気味よい音を立てて捕球すると、軽い力で真咲にボールを投げ返した。

正面じゃなくて、横向きながら投げてみろ、とアドバイスする。すると、力の入れ方が分からなくなつたのか、真咲の指から離れたボールは行成の頭上を超えて遠くへと抜けてしまった。

駆け足でボールを追いかける。金網にバウンドしたところを捕まえて、元いた場所に走つて戻つた。

「結構やるじやん」

そう褒めると、真咲は曖昧に笑つた。まだ小学生なのに随分と大人びた顔をするのだな、と感じた。

真咲はなかなか筋がいい。「コントロールはいまいちだが、フォームはきれいだし、捕球をした際にボールに力がある。

「野球やったことある? ううん。ルールもほとんどわかんない。

じゃあプロの試合とか見に行つたことない? ない。テレビでも見たことない? ……田舎でチャンネルが少なかつたから。

そんなやりとりをしつつ、「今の子は娯楽が分散してるからそんなもんかな」と妙に寂しく思った。

時折頭上を重機がゴーッと唸りながら駆け抜ける。その合間に皮と軟球の立てる軽い音だけが数秒おきに響いていた。

「ユキナリは、ずっと野球やつてたの?」

「ああ。高校までは朝も夜も野球。毎日毎日、そのことしか考えられないよ」

軽くステップを踏みながら、少し高めにボールを放る。
捕れないかな、と思つたが真咲は体の前できちんと捕球した。

「俺さあ、左利きでしょ。左投げのピッチャーツてあんまりいないから小さい頃は重宝されんのね」

過去を振り返りながら語り出す。こんな話、友人はおろか付き合つた女の子にすら言わなかつた。

「でも中学の頃はあんまり学校が強くなくて……。どこの高校からも推薦はもらえなくて、結局地元の公立高校いつたのね」

自分の出身の県は、プロチームの本拠地が在籍することもあって、近隣の県より野球が盛んな土地柄だった。

きっと真咲には言つても理解できだらう。だけどそんな考え

とは裏腹に、言葉は次々に溢れてくる。

「甲子園出ようと思つて、そんでもつて行く行くはプロになりたくて死ぬほど練習したよ。県大会の、結構いいとこまで行つたんだぜ」

そこまで言つと、行成は急に声のトーンを落とした。

「だけど結局、私立の奴らには勝てなかつた。あいつら、設備も選手層も段違いだもん」

県大会の準々決勝。1点リード迎えた最終回、ノーアウト1・3塁。替えのピッチャーはいない。迎えたバッターはプロのスカウトにも目を付けられている四番の強打者で、今日はここまでなんとか抑えていた。

ここを切り抜ければ、準決勝行きの切符を手に入れたも同然だ。頑張れ、いける。どくどくと沸き立つ体中の血を感じながら、そう自分を鼓舞した。

キヤツチャーのサインを確認する。外に一球外したから、次は内角低め。

(あつー！)

手元が狂つてすっぽ抜けてしまつた。高めに浮いたボールはど真ん中の絶好球。

鮮烈な残像と共に、金属音が鳴り響いた。白いボールは雲一つない空に吸い込まれるように舞い上がりしていく。

ボールは場外へと消えて目で追うのは不可能になつた。特大ホールランだ。

今思えば、あの時、あの瞬間の直前が自分のピークだつた。甲子園という夢の舞台が一番近づいて、そして放物線と共にあつけなく途切れた。

悔しくて悔しくて、野球はやめてしまった。試合も見なくなつたし、なるべく野球から距離を置いて過ごすよつになつた。

「大学では、何やつてたの？」

「何つて、専攻のこと？ 法律だよ」

「じゃあ、弁護士さんとかになるつもりだったの？」

「うーん……、それもまあ、考えたけど」

「うん」

「やっぱああいうのになれる奴つて特別だよ。俺みたいな中途半端なのじや無理だ」

今まで練習に打ち込んでいた時間を受験勉強に替えたら、引退から1年半かかってまあまあの大学に受かることができた。もしかして野球に費やしていた時間は無駄だつたんじゃないかとすら思った。大学に入った当初は、それなりに勉強も真面目にしていた。だけど記憶力も議論の組み立ても、優秀な学生には到底及ばない。気が付くと、あれだけ頑張つて入つたはずの学校なのに、サボりがちになつていた。

勉強にじり恋愛にじり、本当に夢中になることなんて、何一つ見つかなかつた。

それなのに、体は何年経つても覚えている。グローブに白球が吸い込まれる音の心地よさや、ボールをリリースするときの全身の神経が指先に集まる感じ。

(「だわってたのは、俺のほうかもしれないな）

手の中のボールに目を落とす。硬球よりも大きくて軟らかいが、
きっとバットで思いつきり振り抜いたら、笑っちゃうぐらい気持ち
よく飛んでいくだろ？。

「ユキナリ、ユウヒー！」

あの日、見えなくなつた白いボールは、いまどきの辺を転がつてい
るのだろうか。泥にまみれて、ボロボロになつて、誰にも見向かれ
ず朽ち果てているのだろうか。それとも、案外どこかの男の子に拾わ
れて、大切な遊び道具として使われているのかもしれない。

行成は金網ギリギリいっぱいまで後ろにダッシュすると、持てる
限りの力でボールを高く放つた。

キャッチボールを初めて1時間ほど経つたといひで、行成は水分
を補給するがてらに真咲へ呴いた。

「疲れたな」

「こんなんでバテるなんて、おじさんだねー」

ニヤニヤしながらそう言つ真咲に、行成は大人げなくムツとした。

「お前がノーコンだからだよ」

昔から、筋力や敏捷性はあるものの、暑さにだけは弱かつた。そ

れにここ5年ほどまともに体を動かさず不摂生ばかりしていたのだから、へばつてしまふのも無理はない。

せつかく外に出たのだから、と帰り際に商店街へ立ち寄った。本屋で予約していた雑誌を受け取り店内を探すと、真咲は読んでいた本を慌てて本棚へ戻した。

「何読んでたんだ?」

「う、うん。何でもない」

真咲が立っていたのは、中学受験用の参考書のコーナーだった。

(ふーん……、そうね……)

* * *

アパートに戻る頃には口が西に傾いていて、糸が切れてしまったのか、真咲は本を読んでる途中で部屋の隅で眠りこんでしまった。

「お前、そんなところで寝ると風邪引くぞ」

「うーん……」

返事はするものの、動く気配はない。仕方なく行成は、真咲の体に薄手の毛布をかけてやった。

しかし変な一日だった。真咲の気分転換のため外へ連れ出したけれど、結局楽しんでいたのは自分の方だったかもしれない。(キャッチボールを選んだのは、他に遊びを知らないからだ)

真咲にも随分懐かれたものだと思つ。生意気な口を利くよつとも

なつたし。犬を捕まえて送つたときは、もう一度と会わないものだ
と思っていたが。

細い首、流れる糸のような髪、すべすべの肌、長い睫毛。今は中
性的でどちらかといふと「かわいい」顔ではあるが、ここから甘い
雰囲気を抜いたらどんな男になるのだろう。おそらく、人の噂に上
るような色男になつていることだろう。

この子は、今は友達がないからこうやって自分のところに来て
いるが、そのうちきっと自分に見合つた相手を見つける時が来るは
ずだ。

自分は、獣医にも、野球選手にも、弁護士にもなれなかつた。だ
けれども、こいつは違う。将来がいくらでも待つてゐるし、今から
エリートコースに乗つて、このまま成長したらどんな大物になつて
いるか分からぬ。10年後もこいつして歳の離れた友達として、自
分を慕つてくれるだろうか。

その答えは、時間を待たずとも既に出てゐる気がした。

「それじゃ、いよいよ最後の置換だな」

手順書と金魚の入ったタッパーを見比べながら、真咲の隣に立つた行成が言い放つた。

透明骨格標本作りも終盤に入り、今日は水酸化ナトリウム溶液からグリセリンへの置換にとりかかる。

赤と黒だった金魚もいまではすっかり色が抜け落ちて、どちらも体が紫色に透き通っていた。

料理用の電子スケールにビーカーを乗せ、正確に計量してからタッパーの中へと入れる。

ここから、2～3時間置きにだんだんとグリセリンの濃度を高くしていく。水酸化ナトリウムが肌に付かないよう、慎重に作業した。

「よし、これで一旦休憩だな」

ここまで来ると同時に時間がかかった。当初できあがるまで1ヶ月ほど、と行成は言っていたが、終業式の日から初めて、すでに今は長い夏休みの最終週である。

外では相変わらず蝉がやかましく鳴いている。けれどふと空を見上げれば、最近日の暮れるのが妙に早くなつたな、と気が付く。

次の置換まで約2時間。外に出る時間もない。行成がテーブルの前に腰を下ろしてノートパソコンを開くと、真咲もその斜め向かいに座り、これまで撮った標本の写真をペラペラとめくつた。どうやら今日は待っている間、レポート作りをするらしい。

手順書を参考にしながら大人しく作業をしていた真咲だが、「脱色4日目」と書いたところで、あーあ、と大きくため息をついてテーブル上に突っ伏した。

「あー、もうすぐ一学期かあ」
「どうした、すげえ嫌そうじゃん」

うーん、と真咲は首を捻る。

「なんか、また学校始まると思つて、気が重くつて
「やっぱお前、友達少ないこと気にしてんの?」

そう言つと、真咲は俯いて黙つてしまつた。図星だつたらしい。
行成はくつと田を細めると、パソコンの画面から視線を外して真咲に向き直つた。

「いの前言つたことわあ」

真咲が顔を上げて「どれ?」と聞き返すと、「昼休みに声かければ友達なんてどうにかなるとかそんなの」と答えた。

「あれ、やっぱ俺がまちがつてたかも」

えつ……、と真咲が固まる。解つてもらえて嬉しいような、気を遣われて戸惑つているような、そんな複雑な顔だ。

「俺の頃はそつだつたけど、今の子はいろいろあるから、そつ簡単に行かないかもしれないな」

行成は先日遊座が語つていたことを思い出した。「上の学年にな

るほど難しい」と。「自分たちが見てたのは世界の一部だ」と。

だから真咲がうまく周りに馴染めなかつたとしても、本人が悪い訳じゃないのだ。自分の小さい頃は、偶然意地悪な人間がいなかつただけかもしないのだから。

行成の言葉に、真咲は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「でも……、頑張つてみるよ」

そう意氣込んだ真咲の生真面目さが可笑しくて、行成は思わず吹き出してしまつた。

「ははっ」

何を笑われているのか分からなくて、真咲は憮然として首を傾げた。

「何でわいらつの」

「……お前、ホントにいいヤツだよな」

苦手なことなら敢えて立ち向かわずに逃げてもいいのに、期待に応えようと努力をする。

そんな自分にはない「純粋さ」を幼いと思つ半面、いつまでも持つていてほしいと願つてしまつ。

「少なくとも俺はお前のこと友達だと思つてゐるし、俺は好きだよ、お前の」と

多少クサイ台詞だとは承知していたが、しおげている子供を立ち直らせるにはこれぐらいい言つてやつてもいいはずだ。

言われた真咲はとくとく、案の定耳まで真つ赤になつてしまつた。

「友達なのに好きって変なの」

素直に「ありがと」「言えないのも若さ故か。そう思えば腹も立たない。

行成は真咲の方へ手をのばすと、その細い背中をポンポンと二度叩いた。

「変かな。でもまあ、自信持つて」

細い顎に高すぎない鼻。照れている横顔も可愛らしい。きっとこれは、思っていたよりも母性本能をくすぐるタイプじゃないだろうか。

もし自分がこの年でこのルックスだったら、周りの女の子に片端から声掛けるのにな、と変なことを想像した。

* * *

その後の真咲は、ふわふわと覚束ない心と必死に戦いながらも、レポート作りに専念した。

3回目の置換をしているところで、会所の外からチャイムの音が聞こえた。午後6時だ。今日は母親が普通番の日だから、もうそろそろ帰らなくてはいけない。

「あとは明日になつたら防腐剤入れて終わりだな」

感慨深げに行成がため息をついた。「明日ビンを必ず持つてこいよ」と付け加えたので、真咲は手の平に「びん」とマジックで大き

く書いた。

真咲は後かたづけをしながら、まるか頭上にある行成の顔を見上げた。

「ユキナリ、標本作りはもう終わつただナビセ」

きつと、明日になつてしまつては言えない。だから、今のうひ告げておきたい。

「これからも、遊びにきていい?」

ドキドキと胸が高鳴る。行成が次の言葉を口にするまでの時間が、とてもなく長いもののように感じられた。

すると行成は、きょとんとした顔で真咲を見つめ返した。

「なんで?」

「なんでつて……」

そう聞かれてもうまく言葉が出てこない。

やはり迷惑だつたんだろうか。がっくりと肩を落としそうになつたその時、行成は凝つた肩をぼぐすように回しながら子供のように破顔した。

「いいに決まつてんだろ」

絶望の淵に立たされていたのが、急に引き戻されるよつて心が舞い上がるしていく。

「なんで」の後に続くのは「わざわざそんなこと聞くの」ひとつ言葉だつたらしい。

何故だか急に行成の顔を見るのが恥ずかしくなる。俯きながら真

咲は「そ、そつか」とだけ小声で言つた。

それから真咲は何かに追はれて立たれりながらして、早足で行成のアパートを後にした。

家までの道のりを急ぐ。吹く風は涼しくなつてきてるのに、顔の赤みがなかなか取れない。

『俺は好きだよ、お前のこと』

半ば駆けるように歩きながら、彼の言葉を反射する。思わず憎まれ口で応じてしまつたが、本当はものすごく嬉しかつた。

(好き、だつて)

たつた2文字の言葉の響きだけで、初めて彼と出会つた時からくすぶつっていた感情がなんなのか、説明がついてしまつ気がした。彼が笑うとうれしい、近くに寄られるとどきどきする、泣いていふと思つたときは代わつてあげたいと願つた……、ずっと見て見ないふりをしてきたけれど、彼と一緒にいるときはいつもこんな事を考えていた。

(好き)

心の中で呴いてみる。すると、今まで抑えつけられていた気持ちが、押し寄せる波のように溢れ出した。

(自分も、コキナリのことが好きだ)

しかし真咲は、彼の「好き」と自分の「好き」は全く違つ種類の

ものである」とか、はつらつと感じ取っていた。

クラスメイト（1）

何をやっても落ち着くことのできない日々が続き、夏休みの最終盤は駆け足で過ぎていった。

「明日から学校なんだから、今日は早く寝なさい」

一階のリビングルームでニコースなどをなんとなく見ていた真咲に、母親が気怠そうに忠告した。

階段を登つて一階の自室のドアを開ける。
机の上には、この夏休みをかけて完成させた金魚の標本が鎮座していた。

ガラス瓶の中にぽつかりと浮かんだ透明の魚。見る角度を変えると、濃く染まっている部分とそうでない部分が折り重なって微妙に色合いが変わる。眺めているだけで不思議な気分に囚われるのは、色合いが美しいからだけじゃない。

真咲の脳裏に、一つ一つの行程がよぎる。そしてその度に、すぐ横にいてアドバイスをくれたあの人の声も笑顔も。

『自信持つてつて』

明日からまた学校が始まるのは不安だ。でも自分は、きっと何があつても頑張れる。そんな気がした。

日が変わつて、朝が訪れた。カレンダー上では既に秋と言つていはずなのに、青く晴れた空には相変わらず元気な太陽がぎらぎらと輝いていた。

一学期のはじまりだ。それまでより少しだけ軽い足取りで学校へ向かうと、昇降口のところで同じクラスの女子と一緒にになった。

「おはよ」

「お、おはよ」

さむいちなく挨拶を返す。この女子は誰にでも分け隔てなく接し、話題も豊富な子で、真咲としてももうちょっと仲良くなつてみたいと思っていた。

けれど、教室ではリーダー格の女子が非常に彼女を気に入つており、「側近」として常に彼女を離さないため、話しかけられるのはどうしてもためらわれた。

宿題全部終わつた? と聞かれたので、一応。と答える。

えらいねえ、私なんかずっと海外に旅行に行つてたからできなかつたよ、とその女子は言った。真咲ちゃんはどこか行つた? と続けられたが、夏休み中は叔父さんと山に行つてロープウェイに乗つた以外はほとんど遠出もできなかつた。

ううん、と首を振る。自分の経験の少なさが、身にしみて情けなかつた。

教室に着くと、皆の日焼けした顔が、少し大人びたようにも見えた。それぞれ土産物を交換したり、夏休み中につつた出来事を語り合つたりではしゃいでいたが、その輪の中にも加われず、真咲はぼんやりと窓の外を眺めていた。

その日は始業式のあと、教室にもどつて夏休みの宿題の提出が行われた。

教科”との問題集、読書感想文、日記などは教室の前に置かれた教卓に、自由研究は教室の後ろ・ランドセル入れの上に並べるよう指示をされた。

自由研究は建前上「何を作つてもいい」といづれになつてるので、工作キットでつくったと思われるラジコンロボから、明らかにやつつけで済ませたような粘土細工、細かい作業が得意な女子などは一メートル四方にも及ぶ大作のパッチワークを持つてきていた。真咲は自作の骨格標本とレポートを、わざと隅っこに置いた。目立ちたくないという理由もあつたが、それよりもヘタに触られて壊されたくないという気持ちがあつたからだ。

帰りの会が終わり、さあ帰ろうとランドセルを肩に掛けたとき、真咲はちょいちょい、と担任の教師に手招きをされた。

何事がと思い教師について行く。教師は一日廊下に真咲を連れ出すと、しばらくそこで待つてているように言われた。

数分後担任が学年主任の中年教師を伴つて戻ってきた。そしてほとんどの児童が帰ってしまった教室に再び入ると、後方に並べられた自由研究の中から、担任は真咲の作った標本を指示して学年主任へと見せた。

「これがさつき先生が言つてたやつですか。いやはや本当にすごい出来だ」

学年主任が感心しきりと言つた感じでため息をついた。でしう、と担任が何故か誇らしげに答える。

一方の真咲は、いきなりの賞賛に事態が飲み込めずにいた。なぜ学年主任まで来るんだろう？ その事ばかりが気になつた。

「今回のはこれで行きましょう」

「文句なしで決まりですね」

そんな言葉を交わしているが、何のことやら。

戸惑うしかできない真咲に、担任が穏やかな声で告げた。

「今度この地区的科学展がやるんだけど、つむの学校にも参加のお願いが来てるのね。それで、学校代表として、真咲ちゃんの研究を出品してもいいかしら」

「えつ……」

まさかそんな大それた話になつては予想だにしておりず、急に心拍数が上がる。

どうしよう、と一瞬逡巡した。できればあまり目立つよくなことは避けたかった。

だけどこのことを一緒に作った彼に伝えたら、きっと喜んでくれるに違いない。やつたじやん、そう言って笑う顔までが想像できた。気が付くと真咲は「はい」と担任に向かつて返事をしていた。

* * *

次の日

朝から雨が降っていた。昼休みは外で遊べず鬱屈が貯まっているのか、教室の後ろで男子達がぎやあぎやあと騒ぎ始めた。

日直の真咲は黒板を消していた。騒々しいと思つたが、注意するほど仲良くもない。

そのうちプロレス¹っこにも飽きた男子児童たちは、教室の後ろに並べられた自由研究を弄りだした。

お前のは手抜きだ、そっちこそ父親に手伝つてもうつたんだろう、そんな会話が聞こえてくる。

「なんだこれ、気持ち悪い！」

そう言つたのは久慈昂という男子つた。

久慈は体は小柄だつたがその分気が強くて手が早く、やれ女子を泣かせただの、学校の規則を破つて危険な場所で遊んでいたの、たびたびもめ事を起こすので先生達も頭を悩ませているようだつた。真咲としても久慈は授業妨害をするので苦手だつた。ただ、教室の隅にいる真咲と、良くも悪くもクラスの中心となつてゐる久慈では、ほとんど関わることもない。なるべく距離を置いていれば、さほど迷惑もかからなかつた。

「オバケだ、オバケ。魚のオバケだよ」

気になる言葉が聞こえて、耳がぴくりと動いた。
慌てて振り返る。すると久慈とその取り巻き2・3人が、真咲の標本を手にとつて、気味悪そうに眺めていた。

「うげえ、チョーグロい」

「さわんな、さわんな。呪われるぞ」

止める、乱暴に扱うな、そう叫びたくなつた。

けれど、そんな風に食つて掛かつたらやつらがますます調子に乗るか、ドン引きされていつそう孤立してしまいかどつちかだ。
煮えくりかえる心をなんとか宥めつつ、真咲は再び黒板に向ひ直つた。

と、その時だ。

(がしゃん!)

何かが割れる音と共に、教室が静まりかえった。

嫌な予感がする。恐る恐る振り返ると、教室の床にじろりとした液体が教室に溜まりを作っていた。

ふらふらとした足取りで、教室の後ろに吸い寄せられるように移動する。水たまりに近づいてみてみると、浮いているのは……かつてこんぶとうめぼしと名付けていた金魚の標本だ。床に落とした衝撃か、骨がところどころひしゃげてしまっていた。

ふつん、と何かがキレた音がした。

「これやつたの……」

真咲のただならぬ剣幕に、遠巻きに見ていた男子があいつ、と久慈を指さした。

真咲は久慈に近づくと、低い声で言つた。

「ちよつとあんた、何やつてんだよ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963w/>

静かの海

2011年11月21日18時07分発行